
まだ見ぬ嫁の為に

マスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まだ見ぬ嫁の為に

【Nコード】

N8889Y

【作者名】

マスター

【あらすじ】

ハンターハンターの世界に二度目の人生を得た主人公が、将来誕生するであろう嫁獲得を目指し遙たかみを目指す。

目的達成の為ならば、原作主人公一行すら利用する覚悟。なぜなら、嫁獲得に一番の障害になるのはゴンとキルアにほかならない。

そんな、欲望に素直な少年が健気に生きる日常を描いた物語。

主人公の名前が、作者の前作と同じですが、
全く、関係ありません。

第1話（前書き）

漫画連載に伴い作者の中で再び熱が付いたので、ハンターハンターのSSを書いてみることにしました。

誤字脱字等は、なるべく気を付けておりますが、今までの実績上取り切れてない可能性が大了。

先に謝らせてください。

読み汚し申し訳ありません。

では、再びよろしくお願い致します。

主人公の名前は、作者の前作と同じですが、一切関係ありません。転生特典などはありません。

第1話

今年で4歳になるが、こんな世界に生まれなくなかったと思っていた。

誰が、好き好んで人の命が紙屑みたいな価値の世界に転生しなきゃいけないのだ。

出来る事ならば、人が死なない世界に転生したかった。出来る事ならば、学園物などが理想だ…あえて例を言うならば『TO LOVE E〇』とか『アマガ〇』などがよかった。原作は、読んだ事が無いのでよく知らないが、かなりリア充的な展開が期待できただろう。

『本日、ハンター協会のネテロ会長が…』

TV放送で一番聴きたくない単語が流れた。

そう…この世界は、HUNTER×HUNTER!!

日常を送るには、とても辛い世界。

非日常を過ごすには念能力と呼ばれる超能力紛いな物が必要な世界。だが、それでは、お腹を痛めてまで私を生んでくれた両親に申し訳ないと思い。最近、考えを改める事にした。

そこで、アリ編までしか原作を知らない私が必死に考えた人生プランがこうだ。

？ 念能力の取得
？ グリッドアイランドの『支配者の祝福』を入手！！
？ ネフェルピトーを嫁として確保！！ ↑ 実は、一番重要な目標
？ ハンター試験合格

正直、自分でも無理な課題を挙げたと思う。だって、原作キャラや旅団との遭遇率が高過ぎる。

この世界で生き残る為にも最低限？は必須。？を手に入れて世界から隔離された環境で又クヌクと過ごす！！そして、何より重要なのが？だ。だが、これを達成する条件は、果てしなく厳しい。だって、ゴンさんやキルアを相手にしないといけない可能性があるからだ。正直、あの状態になったゴンさんには逆立ちをしても勝てないだろう。だが、われに秘策あり！！その方法は、まだ秘密だ。？と？を達成する為にも、やはり？の目標は不可欠。そして、？を獲得する手段として？だ。

「そろそろ、道場の時間でしょう？遅れずに行くのよ〜レイア」

「はい、もうすぐ行きます。お母様」

この世界では、前世の世界と違い人間の限界を超えている連中が多い。その事から鍛えれば誰でもある程度のところまでたどり着けるのは明白だ。両親がサラリーマンと専業主婦の私がどこまで強くなれるかは疑問ではあるが…とりあえず、頑張ります！！

ちなみに、私の場合は俗に言うアルビノ呼ばれる遺伝子疾患を患っており、少しでも体が丈夫になりたいという名目で道場に通わせてもらっている。後、容姿については…ぶっちゃけ、某人型汎用兵器のアニメに出てきたカヲル君だ。

そして、私は今日も元気に心源流拳法道場へ通う。

心源流拳法道場にて。

「イチ！　二！　サン！　ヨン！……………」

道場では、同年代に近い子供も多数いる。やはり、ハンター協会会長と同じ流派という事で人気なのだろうか、それとも自分の身程度を守るだけの力を付けておいてあげたいとおもう親心からなのだろうか。この世界の犯罪率は、前世の日本とは比べ物にならないからね。

それにしても…子供相手に多少は優しく指導してくれているというのにやはりキツイ。

腕立て、腹筋、スクワット、マラソン、柔軟体操が準備体操で終わり次第。正拳突き　や　子供同士の組手。先輩からの型の指導など一日でたくさんのことをやる。今年から通い始めたが、みんなの練習についていくのがやっとだ。

全く、原作キャラたちの性能に啞然とするな。ひと桁の年齢で天空闘技場を200階まで上り詰めるってどういう事よ。

「はあ…」

「レイア！！　たるんどるぞ！！　マラソン2km追加だ」

「サーイエッサー！！」

ため息をつく私に、道場の高弟から活が入った。

くっそ！！ 誰でもいいから私に早く念能力を教えてくださいー！。

レイア私室にて。

「今日も疲れた〜」

いくら体力が必要だからって、四歳児には無理なレベルのメニューな気がする。だが、ここ最近着実に体力が底上げされているのも事実である。これが、話に聞く超回復と言う奴なのだろう。それとも、○極ワールド新法則なのだろうか。

このままの状況が続ければ、体力だけは確実に付くだろ。しかし、念能力については微妙だ。高弟になり師範代クラスの目に止まれば、開花させてもらえるかもしれないが…期待はできないだろう。やはり、念能力取得のためにハンターを目指すしかないかな。

？の目標達成の為に、どんなに遅くても原作キャラたちと同じ時期に念能力を学ばなければ、達成は不可能だろう。

私が合格可能なハンター試験は……やはり、原作キャラたちと同じ試験しかないだろうな。内容は、ある程度把握出来ている為、対策がしやすい。

ただし、ヒソカとイルミともご対面してしまうというマイナス要素もある。しかし、ネフェルピトーを嫁に迎えるという欲望と天秤に

かければあら不思議：天秤がネフェルピトー確保の方に傾く。

機会をみて、両親にハンター試験受験に付いて話そう。未成年の場合は、色々と許可が必要だった気がする。その後、道場のハンター試験経験者に指導を頼もう。それが例え茨の道であろうとも男にはやらねばならない時もある。

まずは、例の試験がいつなのかを調べてから今後の計画を立てよう。せめて、私がゴンやキルアと同年代でないことを切に願う。才能の差を少しでも埋める時間が欲しい。

数日後。

原作キャラが参加するハンター試験（287期）がいつなのかが判明した。その結果を見て私は、安堵した。なぜなら、今から12年後だからである。これだけの猶予期間があれば、道場で血の滲む様な努力をすれば最低限合格可能ラインにはなれるだろう。

学業から両立は、大変だろうが頑張るしかない。仮にハンターになれたとしても、世の中で生きていく以上、最低限の学力は必要だからね。

「さーで、いくら12年後とはいえどうやって両親に切り出そうかな…」

問題は山済みである。12年の間にどれだけの問題を解決できるだろうか…いや、全て解決せねばならないだろう。考えるだけで気が重いな。

こういう時は、趣味に没頭するのが一番だ。

私は机の引き出しから、彫刻刀と2Lペットボトル位の木片を机の引き出しから取り出した。前世では、手先が器用だった事もあり趣味でフィギュア原型師をやっていた。おまけに、存外人気が出て某イベントではそれなりに稼いでいた事もあった。

まあ、この世界でフィギュアのような至高な趣味を持つ人物など、そうそう居ないだろうから収入には期待できないがね。

そして、私は今日も疲れを癒す為に趣味に没頭する。

この趣味が意外な人物の目に止まるとは、思ってもみなかったレイアである。

第1話（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

更新ペースは、亀だと思いますが
長い目で見ていただけると幸いです。

第2話

ハンター試験受験を心に決めてから、早二年…6歳のレイアです。

俗に言う小学校一年生です。

ハンターハンターの世界にも学校ってあるんですね。てっきり、自己学習や通信教育しか存在しないと思っていました。だって、原作じゃそんな描写なかったしからね。

という事で、二回目の小学生を堪能しております。いやー、前世で社会人を経験している私にとって2時や3時に自宅に帰るのはヌルゲーもいいところだ。

だけど、道場に通う時間が学校の為、短くなってしまったのは少し痛いかнаと思ったけど…そんな事は無駄な心配だった。先輩達が濃厚なトレーニングメニューをしつかりと考えてくれている為、時間が短くなるうと総運動量は変わらないという虐め。

今日も道場で鍛錬を終えて、疲れた体に鞭を打って帰宅した。

このままでは、ハンター試験前に私が死ぬんじゃないだろうかと思うくらいに疲れた。原作キャラの才能が妬ましい。キルアなんて6歳で天空闘技場を僅か二ヶ月で150階まで登ったんでしょ。きつと私が一ヶ月かかった事を一時間とかからずにモノにしてしまうだろう。

やめた やめた!!

こういう辛気臭い事を考えるのは、ダメだ。そもそも比べる対象が誤っているのだ。この世界の中心的存在と脇役の自分を比べるなどナンセンスだ。こういう時は、電腦ネットと趣味のフィギュア原型でも作ろう。

「お、またM i l k yから返事がきたか。相変わらずマメな人だな」

この二年で私のフィギュアが電腦ネットのオタクの中でも稀に話題に挙げられるようになるまで、腕を上げた。おかげで、こういったファンの方からメッセージが貰えるようにもなった。それにしても、木彫りフィギュア何てマニアックな代物を毎回買ってくれるこの人に感謝しないといけないね。

私のフィギュアは、下着のシワまで丁寧に作っている為、一ヶ月で1・2体程度しか作れない。出来上がり次第、即売付きのネットオークションに流している。その殆どを落札してくれているのがM i l k yというハンドルネームの人だ。全く、原価が0円に近い商品が一体辺り10万ジェニーで売れるのだからメシウマだよ。

「なるほどなるほど…色を塗ったフィギュアを売り出して欲しいか」

M i l k yからのメールには、たわいない挨拶とフィギュアを塗装して売り出して欲しいとのことだ。本来フィギュアとは、塗装されてあるべきものと印刷すれば原稿用紙5枚にはなる程の文章を書いてきた。塗装をする事に対して誰かの師事を仰ぎたいのであれば手配までしてくれると至れり尽くせりだ。

何者かは知らないが、熱い漢であることは間違いないな。きっと、フィギュアに命をかけているようなそんな人物だろう。折角の機会だからダメ元でお願いしてみようかな。ちょうど、漆塗りに興味が

あったから　その辺の手配できたらお願いと書いておこう。

「木彫りフィギュアの漆塗りとか買う方もアレだが…それを趣味で作ろうとする私も相当のアホだな」

メール返信完了。

さてさて、あんまり遅いと両親が心配するから今日も寝るとしよう。

一週間後。

学校から帰ってきてみると、家の前に黒塗りの高級車が止まっています。まるで、ドラマを見ているかのようです。

あれ、これってかなりまずい状況じゃない!?

父が会社のお金に手を付けてその代償に私と母が売られるとか、誰かの連帯保証人で借りた人が逃げたから回収にきたとか展開か!?

だが、どちらにせよ普通の状況ではない。

ここは、素直に警察に助けを求めに逃げるのが得策だろう。私のような子供が大人の武力に叶うわけもないからね。

私が身を翻し、この場を去ろうとした瞬間　車に乗っている黒いスーツを着込んだドライバーと目があつた。

ゾクゾク

こいつは、ヤバイ！！

道場に通っている事から自分より強い人は見慣れているので、多少相手が強かろうと驚く事はない。しかし、あのドライバー明らかに只者ではない。道場の高弟よりかは、確実に強い。下手したら師範代にも届くかもしれない。そう感じた。

逃げる！！

それが私にできる唯一の手段だった。逃げ切れるかどうかなんて問題ではない…逃げる以外に道がないのだ。私は、力の限り人気の多い場所に向かって走った。6歳の足では、あの者から逃げる事など出来ないのは至極当たり前だが…ここは住宅地だ。そして、家から約50mも警察がいる派出所モドキがある。そこまでたどり着けば私の勝ちだ。

ダッダダダダ

地面を力強く蹴り、一心不乱に走る。

ボタン

背後で車の扉を締めると聞こえた瞬間、目の前に黒い壁が現れた。人間急には止まれない…当然 私はそのまま黒い壁に衝突した。

ドーン

どうやら、壁ではなく人と衝突してしまったようだ。本来であれば、こちらが謝らねばならないのだが…私にはそんな余裕はなく。ぶつかった人の助けを求めた。

逆光でよく顔は見えないが…近所の大人だろう。

「お願いします 助けてください!!」

「どうしたのですか？」

なにやら、とても強そうなお声の人だ。

「家に何やら物騒な面構えの人が来て、まだ家には母が…」

「それは、大変ですね。それで、何処にその人達が？」

どこって、私の真後ろから走ってきているでしょう。マフィアみたいな顔つきをしたスーツの男が…

「どこって…あれ？」

振り返ってみれば誰も居ない。あるのは、黒い車だけだ。

・
・
・

「どうなさいました レイア様」

全身から冷汗が流れる。まさに、蛇に睨まれた蛙と言った感じだ。

「ど、どちら様でしょうか？」

「申し遅れました。私は、とある方からレイア様のお手伝いをする
為に遣わされましたワジマと申します。以後よろしくお願いします」

私は、この瞬間 M i l k yというハンドルネームの人が誰なのか
を理解した。まさか、M i l k yがゾルディック家のミルキだった
とは…普通気づくよねと後々思ったレイアであった。

第2話（後書き）

最後までよんでくれてありがとうございます。

ハンター試験開始までは、あと数話こういった展開が続きます@@@

第3話

ゾルディック家執事襲来事件より、二年が経過して今8歳のレイアです。

実は何を隠そう…あの黒スーツを着た執事こそが私の漆塗りの師匠なのである。一体、ゾルディック家の執事は何者だと言いたくなる正直、ここまで多芸に秀でているのならば、執事にフィギュアづくりを命じればいいと思う。

しかも、この人さ…私の実家のお隣に住んでいるのだよ。なんでも私が一人前の漆塗り職人になるまで帰らないそうだ。

両親には、親切なお隣さんから漆塗りを学んでいますと可愛く言っているが…マジ命懸け過ぎる。

「集中しなさい。線が歪んでいます」

「はい！！ 師匠」

という事で今日も元気に漆塗りを学習中です。

早朝に漆塗りを学び、昼間が学校、夕方に道場、夜にフィギュアづくり。既に過労死しそうな殺人的なスケジュールだ。かと言って、漆塗りのフィギュアも勝手にやめられない状況だ。死にたくないもん。

だが、考えようによってはタダで最強のボディーガードを付けてもらっているとも取れるのでありがたさ半分といったところだ。

「そろそろ、学校の時間ですね。行つてらっしゃいませ レイア様」

「今日もご指導ありがとうございました ワジマさん。行つてきます」

基本的にいい人なのだろうが…顔が怖い。いや…ゾルディック家の執事であるからいい人というのは間違いだな。命令一つで二年間指導した私でも躊躇いなく殺すだろう。

怖い 怖い。

学校にて。

「好きです。付き合ってください」

クラス一の美少女が私に告白してきた。正直言えば、私ロリコンでもあるから嬉しいよ。でもね、私は浮気しない事になっているんだ。

「ごめんなさい。私には既に心に決めた人？が居るので」

最近、学校で呼び出される事が多くなった。素直に無視するのもいいのだが…こういう多感な年頃の女性を無下に扱つと後が怖い。だから、誠意をもって謝る事になっている。それでも、翌日には陰口を叩かれることが多いけどね。

モテる容姿に生まれたのは非常に嬉しい。女性に好かれるのも歓迎だ。しかし…断られなければならないのだ。それが、将来の自分の糧にな

るのだから今は耐え忍ぶ。

「や、やっぱりホモだって噂は本当だったのねー」

女の子が何やら大声でとんでもない事を言いながら走り出した。そんな根も葉もない事をどの口がいうんだ！！

「まてや…って、無駄にはええええー」

口封じをしようと思ったときには既に女の子は居なかった。口封じと言っても、当然物理的な意味じゃない。ただ、私がホモじゃないとわかるまでじっくりと話し合いをするだけだ。

翌日、学校では私がホモと認識されていた。

くっそ！！ 登校拒否してもいいレベルだぞ これ。

数週間後の道場にて。

何やら、むさ苦しい高弟から身の毛がよだつような熱い視線を感じる。その高弟は、やたらと私の世話を焼いてくれる…特に組手の相手を積極的にしてくれる。まあ、私としては非常にありがたい。

ここ二年、私はワジマさんが実家でもやっていたと言う筋トレを導入した。筋トレというか…ぶっちゃけ、ゾルディック家の門番がやっていた重石を付けるトレーニングだ。あれが存外、いいトレーニングになるのですよ。まあ、重さはゴン達が付けていたお守りの1/3程度だけだね。子供のうちから無理をすると身長が伸びなくなるから控えめにしておいた。

そんなわけで同世代の子では、既に私の相手としては役者不足となつてしまっている。

だから、年次の上の先輩や高弟に混ざる事もしばしばといった感じだ。

「本日の鍛錬はここまで！！ 皆のものを気を付けて帰るのだぞ。ここ最近、暴漢の被害が多くなつてきている。いいかお前ら…返り討ちにしろ！！」

「『『『『押忍！！』』』』」

まあ、私には関係ないけどね。

こういう時に男に生まれてよかったわとつくづく思う。こういう心配がなくなるからね。母の事は少なからず心配ではあるが…うちのお隣さんを考えれば、何も問題がない。

さーて、今日も死ぬほど疲れたからさっさと家に帰って、掘り掘りしよう…木彫りの意味で。

「お先に失礼します！！」

「ああ、気を付けて帰るんだよ」

道場の皆に挨拶をして、帰路についた。

帰り道にて。

「朱に染まればなんとやら…か」

なんだかんだでこの世界を満喫している自分が怖いな。前世と比べて肉体面がかなり強くなっている事もあるのだろう。まあ、それでも道場の高弟には勝てないけどね。正直、道場の連中を見ているとみんなハンター試験合格できるんじゃないかと思う位だ。特に体力面が異常に優れている気がする。

特に組手の指導をしてくれる高弟なんて、体力・スピード・攻撃力とどれをとっても他の高弟と比べて抜きに出ているからね。恐らくハンター試験受験時のハンゾー位強いんじゃないかな。

ザワザワ

一瞬、肉食獣に狙われているような気がした。

「あれ…誰もいないか。おかしいな、今…気のせいかな」

背後を振り返ってみても誰もいない。周りを見回しても誰もいなかった。きつと、最近頑張りすぎて疲れているのだろう…帰ったら掘り掘りしよう。

翌日、高弟の一人が行方不明になったと聞いた。

ミルキ様からの命令でレイア様の護衛について早二年が経った。

子供の成長とは恐ろしいものだ…私がゾルディックで長年かけて学んだ事をスポンジのように吸収していくのだから。後、4・5年もすれば一人前と言ってもいいだろう。ミルキ様が手厚く保護するのも頷ける。

特にフィギュアといった模型づくりの才能は実に目を見張るものがある。一つ一つの作品に対して愛情すら感じられる程だ。遠くない未来、名前が売れる事は間違いないだろう…主に変態という意味で時計を見るともうすぐ8時になる。

そろそろ、道場が終わり帰宅される時間だ。

最近、この辺で若い男ばかりを狙った暴漢が出ると噂されている。しかも、それなりに腕が立つらしく今だに逮捕に至っていない。レイア様は8歳ではあるが、その身体能力は既に大人にも引けを取らない為、普通の暴漢であれば返り討ちにする事位可能だろう。まさに、心源流拳法に四年も毎日通い続けている成果とも言えるだろう。

「念には念を入れるでしょう」

身だしなみを整えて家を出た。

レイアの帰宅路にて。

レイア様から20m程後方に獲物を狙うような目付きの男がいた。

なるほど…捕まらないはずだ。

あの男は確か、レイア様の身辺調査を行なった際にリストに載っていた。レイア様が通う心源流拳法道場の高弟だったはず。ハンター試験合格間違いなしと言われる逸材であるが、素行が悪いとも言われている。

念能力までは取得していないようだが、身のこなしを見る限り今のレイア様では勝てないだろう。

暴漢がレイア様に背後から襲いかかった。それと同時に私は、暴漢の前に立ちふさがった。

「悪いが、貴様には死んでもらう」

ゴキリ

私は男の背後に回り込み首の骨をへし折った。そして、男の死体を背負ってその場から離れた。

その時間、僅か一秒たらず…誰にも気づかれる事はなかった。

第3話（後書き）

少しペースが早い気もしますが…ハンター試験まで
どんどん行っちゃいます。

やっぱり、レイアは尻に縁がある。

第4話（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

第4話

暴漢事件から更に4年が経過して、12歳になったレイアです。

心源流拳法に通いつめて8年。フィギュア原型師歴も同じく8年。もう、立派な変態の仲間入りを果たしました。ワジマさんからは、今年いっぱい指導する事が無くなると言われて寂しいです。

ワジマさんの事はおいといて、私は父の仕事の関係で家族揃ってヨークシンに来ております。無論、オークションは今現在開催中です。まさか、幻影旅団と関係ないイベントでここにこられたのは僥倖だ。

本日は、いつもの木彫りのフィギュアとは違って変わって時代の最先端を誇る「ねんどろいど」を30体程作って持ってきた。日頃のフィギュアづくりの合間にセコセコと作った物だが、出来栄は自信がある。ジャパンで流行っているアニメや漫画のヒロインをモチーフにしたり、前世で見たことがあるモノを再現したりと様々な物を作ってきた。

と言うわけで、今日も商い頑張ります。

「じゃあ、お父様お母様。15時にホテル前で！！行ってきます」

仕事を終えた両親を二人つきりにしてあげるといふ気遣いのできる息子って素晴らしいよね。本当は、子供一人物騒な場所に行かせるのも良くないと言われたのだが…それでもお父様より強いんだけど
と言ったら、お父様が崩れ落ちた…ごめんねお父様。

ヨークシンの値札競売市にて。

ここは、誰でも好きに取引が出来る会場だ。もつとも、値段は付けないで規定時刻まで最高値を付けた人に売るとというのがルールがあるけどね。

だけど、私の「ねんどろいど」の価値がどの程度か知る良い機会だなとも思う。一般人相手では、1個辺り300ジェニー位で売れればいいかな。いつもフィギュアをオークションにかけているサイトに出せば、良い値で買ってくれる固定客がいるので確実に儲かるが…それではつまらないからね。

という訳で、私はレジャーシートを広げて客を待つ。

一時間経過。

物珍しさに、何人かの目を引くが値段つかず。時間はまだまだあるから、本でも読みながら待つとしよう。

二時間経過。

言うまでもなく、誰も値段を付けてくれません。分かっていたさ、分かっていたさ。私の趣味が極めてごく一部の人間にしか通じないという事くらいね。でもさ…少しくらい夢を見てもいいじゃん。

あまりに暇だったので、近所の露店を見ようかなとも思ったが…荷物を置いたまま離れるなどこの世界では持つて行って下さいと言っているも同義。

私も念能力が使えたら、”凝”で一攫千金大作戦とか出来たのだから…と思いつつ、再び本を読む。

三時間経過。

「子供が一人で露店を開くなんて珍しいね。物騒な人が多いから危ないよ」

「そうなのですか。いやー、自分が作った作品が売れるか試したいなと好奇心でそこまで考えていませんでした」

私があまりに退屈そうで且つ客が来ないから、見に見かねて隣で露店を出しているオジサンが話しかけてきてくれた。もっとも、オジサンの露店も客足はアレだけだね。

「変わった人形だが、なかなかいい腕じゃないか。折角だから、その人形一つとうちの値札のついてない商品を一つ交換しないかい？ 値札競売市に来て手ぶらじゃ帰りにくいだろう。まあ、うちの商品は実家の倉庫から引っ張り出してきたガラクタばかりだがね」

オジサンが苦笑する。

「喜んで！！ どれもこれも私が性を込めて作った作品達です。お好きな子を持って行ってください」

「ありがとう。では…この子を貰うよ」

どうやら、このオジサンはロリコンらしいな。迷わず、某白い悪魔

の人形の白スク水verを取っていったよ。欲しいなら値段つけて買ってくれよ。今ならどれも値段ついてないのに…。

では、私も選ばせてもらいましょう。

「どれにしようかな…」

オジサンの露店の商品は、数こそあるが…その半分以上は値段が付けられていない。そして、一本の変わった形状のナイフに目が行った。最近流行りのデザインではなく、どこか古びたナイフだ。

・
・
・

このナイフ…私の記憶が確かならば、ヨークシン編でゴンが見つかるハズのベンズナイフ!!

「オジサン、このナイフを買っていいかな？」

「値札がついてないから構わんが…子供がナイフを持つのは、関心しないな」

ごもつともな意見だ。

「大丈夫ですよ。私こう見えて、趣味で木彫りを8年近くやってるので刃物の扱いは慣れています」

「そつか、なら気をつけるんだぞ」

ベنزナイフGetだぜ！！

きっと、良い切れ味なのだろうな…これを使ってフィギュア作りた
いな。後、ハンター試験にも持参していこう。きっと、役に立つだ
ろう。

四時間後。

結局、あの後にも買い手がつかず時間切れだ。まあ、売れはしなかつ
たが物々交換でとてもいい品物が手に入ったのは幸運だ。

「じゃあ、オジサンまたねー」

「おう、気をつけるんだぞ 坊主」

タダ同然でベنزナイフをゲットしてすごく気分がいいです。オジ
サンには悪いけど、これが商売なのよね。

「あ…ナイフもったまま飛行機って乗れるのかな」

空港の金属チェックで当然引っかかり、両親に怒られたのは言うま
でもない。

「これも落札完了」

ワジマを送り付けてからというものの、数年でメキメキと腕を上げて

きたな。おまけに、アニメや漫画のキャラだけでなくオリジナルキャラのフィギュアまで出し始めている。しかも、完成度が高い…まるで、完成された作品から取ってきたような感じがする程だ。

今回の新商品「ねんどろいど」も実に素晴らしい。

二頭身でありながら、そのキャラの個性を全く殺していない。むしろ、引き立たせているようにも感じる。

今回のオークションでは、全29体が即売付きで出されいた為、無論全て俺が落札した。

29体…なんだ、この中途半端な数は。

『ワジマ、レイアが作っている「ねんどろいど」という商品を知っているな?』

『存じ上げております。全部で30体作成し、ヨークシンの値札競売市で売り出したそうです。なんでも、一体も売れなかったそうですが…それを見かねて横の露店の方が持っていたナイフと交換したそうです。私もそのナイフを見せていただいたのですが…恐らくは、ベンズナイフかと』

ベンズナイフ…たしか、オヤジが趣味で集めている骨董品だったな。だが、そんなのどうでもいいんだよ。

俺にとって、大事なのはフィギュア!!

それにしても、値札競売市か…相手を見つけ出すのは不可能に近いな。まあ、仕方ない。

依頼すれば、再度作らせる事は可能であろうが、それではファンとして邪道。俺の矜持に反する！！ 作り手の支援はするが 過度な干渉はしない。

俺のクオリティだ。

第4話（後書き）

誤字脱字報告、感想等頂けたらとても嬉しいです。

できれば、原作キャラの正確や口調等で突っこみたい事は、あると思いますが…見てみぬふりをしていただけると幸いです。

休日が終わった…そして、更新速度が激減致します@@

第5話

ヨークシンから更に2年が経過しました。そして、今日で満14歳になりました。言い換えれば、ハンター試験まで後2年というところまで来ていた。

ちなみに、お世話になったワジマさんは昨年実家に帰っていった。ろくに挨拶もできずに別れてしまったのは非常に悲しい。役目が終わったら即座に帰るとか、執事としては有能かもしれないが…人としては幾分かアレですね。まあ、執事の教育方針がかなり特殊な家だから理解はしているけどね。

ワジマさんの事は、置いておいて…

今日は、私の誕生日という事で両親が手作りのケーキまで用意して祝っていただいております。

「お誕生日おめでとう レイア」

「おめでとう レイア」

「ありがとう お父様、お母様」

こうして、家族で食事を楽しめるのは最高だ。やはり、こういう暖かい家庭を持ちたいよね…ピトーと一緒に。そんなわけで、今日一日はいつもの非日常を忘れて ただの子供に戻ります。

数時間後。

両親と楽しい時間をすごし部屋でパソコンを見てみると、一通のメールが来ている。とっても、嫌な予感がする。普通なら、フィギユア関連のメールであろうが、本日は、私の誕生日だ…そんな日にくるメールなど不幸のメールに間違いない。

恐る恐るメールの送信元を見ると、案の定Milkyからだつた。

大事なファンを悪く言うわけではないが、誕生日には見たくないネームであつた。誕生日に、暗殺一家からメールを貰うってさ…なんだか、怖いじゃん。いつも、お前を見ているぞ的な意味でさ。

「えーと、なにになに…」

セオリーの如く、挨拶から入り…誕生日に祝辞…作品に対する評価…次回作の予定の質問などが書かれている。そして最後に…こう書かれていた。

『オヤジ達にレイアの作品を熱く語ったら、家族の像を作ってもらおうという話になった。良い返事が期待している』

・
・
・

ドクンドクン

冷汗は流れ、心拍数はかつてない程に高くなっている。

か、考えるのだ レイア!!

相手の気分を害さず且つこの場を乗り切る方法を…すぐに返事をする必要はないだろうが、どんなに遅くても一週間以内に返事をしなければ本当に命に関わる。

ポク ポク ポク チーーン

ダメだー！ー！！

一休さんスタイルで考えてはみたが何一つアイデアが出てこない。そもそも、ゾルディックの依頼を断るとか無理ゲーだろう。ハンター試験や学業があるから、お断りしますとか言った暁には、イルミに針でめった刺しにされそうだ。

諦めよう…人間諦めが肝心だと何処かで聞いた気がするしね。

私は、素直に快諾の返答を送った。

誕生日に死刑執行書にサインするような行為をする事になるなんて、私は世界一不幸な少年じゃないか。

恐らく、10人の大家族像となると…最低半年は帰れないのかな。家族にどう説明しよう。後、道場にも話をつけておかないとだめだね。

二週間後。

絶対に行きたくないでござる！！どこぞのニート侍みたいなセリフを夜な夜な吐きつつ…とうとう、お迎えの日がやってきました。

快諾のメール送信後は、二週間後に迎えの者を寄こすからそれまでに身辺整理をしておけとの事だった。私が二年後のハンター試験受験の為に頑張っているのを知っていたのだろう。あちらから、道場に行けない為 代案として執事の方が指導をしてくれる事になりました。当然、像作成にあたり報酬までちゃんと用意してくれるとの事だ。

「相手先にご迷惑をおかけしないようにね」

「子供のうちは何事も経験だ、しっかりやってこい」

両親には、電腦ネットで知り合った家庭にホームステイと言って乗り切った。もちろん、裏を合わせる為に、色々とゾルディックの方にも協力いただいた。真実など告げられるはずもない…伝説の暗殺一家にお呼ばれたので一年位戻る事が出来ませんなんて、どの口が言えるというのだ。

私に出来る事は、親に心配を掛けずに笑顔で家を出ていく…ただそれだけさ。

「もちろんですお父様、お母様。では、いつてきますね」。お父様もお母様も体には気を付けてください。毎週必ずメールしますね」

子供らしく、元気に腕を振りながら家を出た。そして、家の目の前に止められている黒塗りの高級車へと足を運んだ。

ボタン

運転席から懐かしい顔の人が出てきた。やはり、あなたが迎えに来てくれましたか…さりげない心遣いなのだろう。

「お久しぶりです レイア様。私めが、ご案内を務めさせていただきます」

「お久しぶりです ワジマさん。今日からよろしくお願いしますね」
神様…今だけは、貴方を信じたいです。どうか、生きて帰れますように。

一週間後、ドキア共和国のククルーマウンテンにて。

実家からココまでは存外遠く 道中ホテルに泊まりながら一週間かけてここまで来ました。なんと、ホテルは全てロイヤルスイートを用意してくれて最高でした。

ブルジョア万歳！！

と、馬鹿な事を考えているうちにゾルディック家の門…通称「黄泉への扉」まで来てしまった。

「す、すごく大きいです」

ゴクリ

「どうなさいましたレイア様？」

「ちょっと、持病の癢が…ところで、あの壁のような扉 開くので

すか？」

少し無理がある返しだったが…まあいいだろう。

「ええ、開きますよ。ここからは、徒歩になりますので私は門番と話を付けてきます。しばしお待ちを」

そういつて、ワジマさんは車を降りて門番の所へ行った。

確か、原作でも車が走れるような場所じゃなかったからね。もしかしたら、車が走れる隠し通路とかもあるかもしれないが、そんなルートは部外者である私の為に使うはずないしね。

それにしても、ヨークシンといいゾルディック家といい思わぬところで原作主人公一行が行く場所に行ったな。

なんの因果やら…。

「試してみようかな」

原作のゴン達一行が着た当初は開ける事が出来なかったこの扉をね。心源流拳法を10年、そして重石トレーニングを8年と原作組みと比べてかなり長い年月を鍛えている。

荷物を持って車を降り、扉の前まで着た。

キルアのように3の扉までは無理にしても、1の扉…出来る事ならば2の扉まで開けられるといいな。全身の筋肉をほぐすために、軽くストレッチをして扉に手を当てた。

ワジマさんもこちらに気がついたが、特に注意する事なく見守っている。

私がこの扉を開ける事ができないと思っているのだろうか。それとも、扉を開けてゾルディック家に正式な手順で入れると思っているのだろうか。

見せてあげましょう…10年間の成果を!!

「うおおおおおおお!!」

扉は、想像以上に重い!!

だが、この程度の門を開けられずしてどうする。将来相手取る事になるゴン、キルア…そして、何よりピトーを手に入れるのにこの程度の壁を開けられなくてどうする!!

力を振り絞れ!! 前へ進め!! この10年間が無駄でなかった事を証明しろ!!

「意地があんだよ!男の子にはっ!!」

ギイゴオオオーーン

1の扉が鈍い音を響かせて、徐々に開いていった。

まさに、感動の瞬間である。原作のゴン達では、来た当初開ける事が出来なかった門をこの私が開ける事に成功したのだ。10年間、幼少期の楽しい期間の全てを犠牲にしたかいがあった言うものだ。

しかし、原作キャラ達は一ヶ月掛からずこの門を開けてしまったという事を後々思い出し、枕を濡らす事になるのであった。

第5話（後書き）

レイアが生きて帰れますように…

第6話

ゾルディック家に軟禁されて、早一年が経ちました。そして、先日15歳になりました。今でも、このコワモテな人達に囲まれて誕生日ケーキの蠟燭を吹き消したのは記憶に新しい。一体、なんの罰ゲームだよと言いたい位だ。

レイア用作業部屋にて。

私は、執事達が暮らしている屋敷で作業をしており、今では執事の皆さんとお茶をする程の仲になりました。赤の他人を本邸に住まわすのは危険だ等の問題だとか、色々と裏事情はありそうだけどね。

『拝啓

お父様、お母様元気にしておりますか？ 私は、ホームステイ先の方と一緒に仲良くやっております。勿論、道場に通っていないからといって怠けてはいませんよ。むしろ、以前より激しいトレーニングを日夜しております。後、今年中には帰れそうなので、久しぶりにお母様の手料理が食べたいです。切実に…

P S

お土産いっぱい買って帰りますから、楽しみにしてください。

敬具』

メール送信完了。

今週の生存報告が完了した。年が明けて作業完了の見通しが経ったが…本当に完成したら家に返してもらえるのかな。死体で家に帰るなんて嫌だよ。

既に像自体は完成し、残るは塗装のみといった現状だ。我ながら良い出来だと思う。シワや血管、髪の毛は勿論再現できるものは全て再現した。まさに、命懸けの作業だった。人間、命懸けとなると限界を超えられると言うのを実感した。

まるで、ここにいるかの様な威圧感だ。

コンコン

「失礼いたします レイア様。そろそろ一息つかれませんか？」

「いつもありがとう ワジマさん」

見計らったかのようなタイミングで私を休憩に誘ってきてくれた。まるで、何処かでメール送信が終わるのを確認しているかのようだ。

「いつ見ても素晴らしいですな…ここ数年で更に腕を挙げられたのがよくわかります。これならば、旦那様達もご満足いただけるでしょう」

「ははは、そう言っていたいただけると作った方としても嬉しいよ。もっとも、出来栄がいいのは当たり前だよ…命懸けだから」

「心中お察しいたします」

私の一言にワジマさんの表情が少し暗くなった。一応、責任は感じ

てくれているのね。

今でも鮮明に思い出せる……一年前のあの時の事を。

「私がご案内できるのは、ここまです。この扉の向こうに皆様がお揃いです。絶対に失礼の無いようにお願い致します。もし、ご機嫌を損ねるような事になれば命の保証はしかねます。ご武運をお祈り致します」

へ！？

本邸まで案内されて、いきなり死ぬかもしれないとか酷すぎる。事前に話をつけて最低限命の保証位してくれよ。

ドーーーーン

まるで、この先に大魔王が居座っていてもおかしくないような立派な扉の前で放置された。男は度胸だ。なるようになれ！！

扉に手を開けるべく手を掛けた。

あ…開かない！！

更に力を入れてみるが開かない。なるほど、試しの門並にきつい扉という事か。

「うおおおおおー！！」

早く、挨拶せねば一秒ごとに相手の機嫌が悪くなるかもしれない。
だが…一向に扉はびくともしない。一体、どれだけ重い扉なのだ。

もしかして、引き戸か…！

古来より、押してもダメなら引いてみと諺があるしな。

では、さっそく…

「どおおおおおりゃー！！！！ああああ！！」

全力で引いてはみるが…びくともしない。こんな扉を毎日開閉する
とは、ゾルディックは化け物か！！ いや、化け物だったわ。

「あの、レイア様…その扉はスライド式です」

・
・
・

そついう事は早く言ってよね！！ 絶対に中で待っている人達に私
のうめき声が聞こえたじゃないか。気を取り直して、扉を開けた。

その場所は、漫画でキルアとシルバが二人で親子の誓い？だっけな
…そんなのをやっていた部屋であった。そして、部屋の中にはゾル
ディック家の人達が総集合していた。当然、キルアも居たがまるで
興味がないようでこちらの顔すら見ない。ミルキとイルミを除いて、
大体そのような反応だ。

イルミから感じるのは、恐怖…圧倒的恐怖！！

「…………ッ」

まるで極寒後に裸で居るかのような感覚に襲われた。一步も動く事ができない…挨拶しようにも声すら発生出来ない。なぜなら、私が何かしらしたら死ぬ…そんな気がしたからだ。

「これイルミ、そんな殺気を立てるな。相手が今にも死にそんな顔になっているぞ」

「わかった。ただし、少しでも変な動きをしたら殺すよ」

無機質な瞳をしたイルミが私に警告をした。

一体、ゾルディック家の総力を前にして何か揉め事を起こせるような人物などこの世にいないだろう。

「孫が悪い事をしたな。楽にするといい」

ゾルディックの中で一番 話を通じそうなゼノが助けてくれた。

「はあはあ…助かりました。ありがとうございます。改まして…レィアと申します。この度は、みなさまの像をお作りするという事でミルキ様よりご依頼を受けました。よろしく お願い致します」

無難に挨拶をした。何をするにも命懸けのこの場では、下手に長い話をするのも死に直結しかねない。早いところ、挨拶を終えてこの場を立ち去りたい…。

「で、俺達は何をすればいいのだ？」

シルバの渋い声が響いた。

対面するだけで、本能が逃げると警告してくる。これが、世界最強の一角…本当に同じ人間なのかと疑問に思ってしまう。一体、どうやって鍛えればそこまでたどり着けるのだ。

胃に穴が空いてしまいそうだ。

「は、はい。皆様の寸法を図るために…」

トストストス

私の足元にイルミの針が飛んできた。

「…立ち上がって一回りしていただければ結構です。後は、私の方でデザイン致します。もし、ご希望のポーズ等があれば言っていたければその通りに作り上げます」

本当は、メジャーとか使ってじっくりと図りたいのだが、イルミから警告された。

大体、ゾルディック家の御婦人相手にそんな暴挙など出来るはずもない。その為、服の上から目視で計測する。私の程の変態になれば、例え服の上からであろうともスリーサイズなどを判断できる。

なんでも、変態という名の紳士になればこの程度常識らしいと電腦ネットで見た。私がよく見るサイトでも、この特技を身に付けてい

る人物は数多いと聞く。

そして、永遠にも感じられる寸法の測定が終わった。今までの人生で一番集中した時間であったのは間違いないだろう。目に、脳に、記憶に全てを記憶させた。集中しすぎて、少々目眩がしてきたよ。

測定後に、キルアの母親とカルトからポーズというか…キルアと手を繋いだ像にしてくれといったささやかなご要望だ。無論、私は快諾しようとしたがキルアが恥ずかしいから止めると言っていたが…最終的に、カルトの泣き落しでキルアが折れた。

ここで私はとある疑問に気がついた。

確か、漫画のバスガイドは10人家族と言っていたが…何度数えても9人しかない。何かしらの事情で席を外しているのだろうか…聞いてみたほうがいいかな。それとも、家庭の事情と言う奴なのかな…ワジマさんも「皆様がお揃いです」と言っていたからね。

他人の家庭事情に踏み込むのは止めておこう…なんだか死亡フラグな気がする。

「そうそう、最後に言い忘れるところだった…もし、くだらない像だったら殺すよ」

ゾクリ

「わ、分かっております。私もプロとしても誇りがあります。作るからには、皆様が満足するものを作ります。ですから、私からも一つお願いが…」

「言ってみていいよ」

「満足いく像を作ったら…生きて帰らせてください。私は、まだやるべき事があるのです」

こんなところで、まだ死ぬわけにはいかない。死ぬなら、嫁の胸の中でと固く誓っているのだから…こんな、むさ苦しいところで死ぬなんてゴメンだ。

という、本心を隠しつつ真剣な眼差しでイルミを見た。

「…好きにすれば、ただし外で家族の事しゃべったら殺すから」

そう言つて、イルミが部屋を出ていった。それにつられて、他の者もご退場していった。

花畑が見えた…マジで!!

だが、生きて帰れる光が見えた。これが、“取引”に該当するかわからないが…家族全員の前で嘘を付くような事をする一家ではないからね。

さて、死ぬ気でやりますか…生き残る為に。

「無茶しやがって…。いいか、絶対死ぬなよ。お前には、まだまだフィギュアを作ってもらわないといけないんだからな。必要な物や欲しい物があつたらなんでも言え、すぐに用意してやる」

パリパリ

ポテチを食べながら励ましてくれるミルキの優しさに泣きそうになった。

「私も死にたくありませんから…死力を尽くしますよ。ミルキ様」

第6話（後書き）

レイアが無事に生きて帰れば、まもなくハンター試験。
ようやくプロローグが終わります！！

P
S

ストックが底をつきましたので、
休日まで更新がないかもしれません。

第7話（前書き）

予約投稿の日付を誤ってしまった…。

第7話

塗装作業を初めて十ヶ月目…今だに、実家に帰れず日々労働に勤しむレイアです。

塗装作業も順調に進み、もう一ヶ月もあれば完成しそうです。最後まで気を抜かずに突き進むぞ！！イルミが気に入るか次第で私の運命が決まるのだから…死にたくないでござる。

そろそろ、ワジマさんと特訓の時間だな。

庭にて。

この10ヶ月、筋トレや組手以外にも拳銃の扱いを教わっております。

パンパンパンパーーン

「命中率は、三割といったところですね。やはり、射撃の才能はあまりないようですね。今からでもナイフに切り替える方がよろしいかと思いますが…」

「うー、でも止まっている的なら命中率ほぼ100%ですよ！！」
ナイフの使い方も勿論上達したいが…私が一番求めているのは、銃の扱いだ。理由は、近距離から中距離まで汎用的に使える。そしてなによりナイフより一撃の殺傷能力が高いからだ。

「戦闘中に銃口が向けられると分かっている止まる者は、まず居ないでしょう。後、正直に申し上げますと…その程度の銃弾、数発食らったところで我々位になれば行動に支障はありません」

確かに、こんな玩具の様な銃では念能力者相手には役不足だ。旅団の怪力馬鹿なんてRPGみたいなのを素手で受け止めていたからな。だが、念能力者といえども無傷というわけではないのも事実。変化系能力者とかだったら、RPGを食らって即死だったに違いない。要するに大事なものは、火力なのだよ。

「だったら、50口径のデザートイーグルでダムダム弾使用だったらどうか？」

大口径の銃に国際条例で禁止されている弾なら、威力はかなりのものだろう。理想は、1cmの鉄板を貫通出来る位の銃が欲しい。

「なるほど…そこまで、殺傷力を高められると気を抜くと死にますね。気を抜かなくても、かなりの痛手ですね。ちなみに、レイア様はどのような目的でお使いになるのですか？」

ワジマさんの目が一瞬鋭くなった。

ゾルディック家の者に手をだすつもりなのか疑っているのだろう。誰が、そんな命知らずな事をするか！！0.1mgでクジラが動かなくなる毒でも平気な連中だぞ…強化系でなくてもダムダム弾程度じゃ殺せる気がしない。そもそも、拳銃を向ける前に私があの世にいるわ。

「ハンター試験…どうしても、受からないといけないんだ。その機会を逃せば私には後がないから…オマケで言えば、自衛の為にね」

「何やら深い事情がありそうですね。わかりました…後日、その銃と弾をご用意いたしましょう。大口径の銃は、今までの銃と違って勝手が違います。ここにいるうちに練習しておいたほうがいいですよ」

嘘！！ 本当に用意してくれるんだ！！

あの大口徑の銃があれば、一部を除くハンター試験の受験者やキメラアントの雑魚共には非常に有効だろう。本来なら、ライセンス獲得後に正規ルートで手に入れるつもりだったが思わぬところで手に入りそうだ。生きて帰る際は、こっそりとカバンに詰めて帰ろう。

「ありがとう ワジマさん！！」

「このくらいお安い御用です」

その後は、筋トレ・組手を行い一日の訓練を終えた。

ここにきて一年と十ヶ月目にしてようやく二の扉を開けきる事が出来るまでに成長しました。私個人としては、あの重量を誇る扉を二年で二の扉まで開けられるようになったのは快挙とも言える。きっと、三の扉を開けるには念を覚えないと不可能に近いだろうな…と少し思った。

その日の夜。

塗装作業が一段落した為 ワジマさん達に誘われて遊戯の準備をしているところです。

ジャラジャラジャラジャラ

「お若いのに麻雀をご存知とは博識ですな レイア様」

「いえいえ、本当に嗜む程度ですよ」

前世でも牌に直に触るのは数回程度しかなかった。基本は、ゲームセンターの脱マーと麻雀漫画で覚えた知識程度しかない為、本当に嗜む程度だ。オートリーチが無いと上がり牌を考えるのだって大変な位だから。

「ははははは、大丈夫ですよ。私達も嗜む程度ですよ」

と、笑いながら答えている。

笑いながら嗜む程度と入ってはいるが、私より麻雀には詳しいし強いだろう。しかし、接待麻雀をしてくれるに違いないと信じてみる。きつと、大人の余裕というやつを見せてくれるんですね。

「折角の勝負ですし、当番を一つ賭けてみませんか？」

当番？

執事の人達の仕事内容を把握しているわけではないけど…掃除当番や食事当番のことだろう。こういう場で断るのは空気が白けるのは確実！！ Noと言えない日本人としては頷く意外選択肢は用意されていいない。

まさに、公明の罠。

「では、全員の賛同が得られたところで始めるとしよう。ミケ餌当番を賭けて……」

ミケ……どこかで聞いた事があるような気もするが思い出せない。確か、サザ○さんに出てきた白猫がそんな名前だった気がするな……いや、あれはタマだったっけな？ まあ、名前からするに可愛らしい子猫or子犬に間違いないだろう。

しかし、執事の皆さんの顔が結構マジになっている。

たかがゲームだというのに、まるで命懸けのゲームをしているかのような空気が漂っている。なにやら、不吉な気配が漂っている。

私が牌を集めて積み上げる為 手を伸ばした時 一斉に執事の手が伸びた。

シャシャシャシャシャシャシャシャシャ

執事が競うかのごとく、凄まじい速さで牌を自分の手元を集めて積み上げていく。あまりの速さに、呆然としてしまった。一体、何をしているんだ！！

カチャ カチャ カチャ

気が付けば、私以外の人は準備を終えていた。

「さあ、レイア様も早くお準備を。既に勝負は、始まっておりま
すよ」

こうして、勝てるはずのない勝負が幕を開けた。

・
・
・

数時間後。

何もかも燃え尽きたレイアです。

やはり、ゾルディックの執事は只者ではない…鬼、悪魔、鬼畜！！
まさに、そんなの言葉がお似合いな人達だと再認識した。

「天和！！」「大三元！！」「国土無双！！」と麻雀初心者でも聞いた事がある役満を連発してきやがる。はつきり言って、あの速さのイカサマに素人の私が付いていけるはずもない。

接待麻雀どころか、完全に力モにされた。そして、向こう二ヶ月間
ミケの餌当番という重要任務を引き受ける事になった。

そして、ミケの姿をみて再度枕を濡らすレイアであった。

第7話（後書き）

レイアは、ミケとは未遭遇で。

原作でのミケの存在を忘れていた設定です。

次話でプロローグ終了です。

次章は、ハンター試験です。

第8話

あれから一ヶ月、ミケに軽く捕食されつつも生きながらえて私の運命を決める日がやってきました。

以前に全員の身体測定もどきを行なった部屋でゾルディック家の家族像のお披露目です。それにしても、世界最強クラスの人物たちが集まりすぎだろう…ここにただで、漏らしそうだ。

しかし、その中にはキルアとミルキが居ないのが謎だ。この一家で私を少なからず私を立ててくれそうなミルキがいないのは正直まずい。イルミの魔の手から私を守ってくれる人が誰も居ないということになるからだ。

キュツキュ

イルミが針の手入れをしている。その様子は、無表情だが楽しそうな雰囲気伝わってくる。

「あ、あのーミルキ様はどちらに？ 出来る事ならば、当方の命に関わる上ご同席お願いしたいのですが…」

「ミルキは、今療養中じゃ。ここは、ワシが代表して採点してやろう。安心せい…ちゃんとした像なら、約束は守らせるわい」

流石は、ゾルディック家の良心と名高いゼノだ！！

それにしても、ミルキが療養中…そして、キルアが居ない。これは、キルア家出イベント発生した後じゃないか！！ すっかり忘れてい

た。覚えていれば、ミルキの体調が治ったタイミングでお披露目をしたのにな。

「はい、よろしくお願い致します。では、これが私の約二年の歳月を掛けて作り上げたゾルディック家皆様の像です！！」

バサーー

被せていた風呂敷を取った。

私の汗と血と涙の結晶とも言える作品がゾルディック家の方に初めて披露された。

「ほほう、これはナカナカじゃの」

ゼノがヒゲを引っ張りつつ褒めてくれた。

私的に言わせて貰えば、完璧だと思う。像と並んでもらって同じポーズをしてもらえば瓜二つと言って申し分ない。身体的特徴は、完璧にトレースした。流石に、念能力者特有の雰囲気までは醸し出せていないが…像の正面に立つと萎縮してしまいそんな威圧感を感じる事が出来る。

「よい像だな…」

ゼノに引き続きシルバにも好評のようだ。やはり、わかる人にわかるようだ。嬉しい限りだ。

「まあまあ、良くやったわ」

「お母様、これ部屋に飾ろう」

キルアの母親とカルトは、絶対に気に入ると自信があったから当然の結果だ。なんせ、キルアを真ん中にして両方の手を二人が握っている像にしているからだ。キルアの心境をリアルに再現するために困り顔にしたものポイントだ。

ミルキ像は、椅子に座ってPCを操作している像にしておいた。まさに、瓜二つだ。ポテチまで再現しておいた。

イルミ像も無論、完璧だ。憎しみを込めて作ったからかもしれないが、他の像以上に禍々しい雰囲気伝わってくる気がする。

「い、いかがでしょうかイルミ様」

「……………」

無言のまま針を磨いている…そして、イルミの手が一瞬ぶれた。

トス

気づけば、足元に針が刺さっているが…あまりの速さに何も見えなかった。もしかして、この針で自害しろと言ったことなのか…嫌でござる。絶対に死にたくないでござる。死ぬ時は、嫁の胸の中と心に固く誓っている。

私の涙目を見たゼノが少し微笑んでいた。尊い命が今にも消えそうだというのに何という事だ。やはり、ゼノも鬼畜だと…。誰でもいいから、今すぐミルキをこの場に呼んできてくれ！！この場を乗り切る為ならミルキ専属のフィギュア造型師になっても構わんぞ。

私が半泣きになっているとイルミが立ち上がり、こちらに近づいてきた。足音は聞こえないが、死神が一步步近づいてくるのがよく分かる。

ああ…ここで人生終わりなのかな。ごめんね ピトー…君を助けてあげられなくて。

最後に遺言くらい聞いてくれるかな…死ぬ前にお父様とお母様に産んでくれたお礼などなど伝えたいな。後…少しでいいので、像の代金として私が死んだ後に両親の口座にお金を振り込んであげて欲しいな。私が最後にできる親孝行はこの位かな。

「ソレ、あげる」

…え!?

あまりの衝撃的な言葉に脳が着いていかない。混乱している私を華麗にスルーして部屋を退場していった。

イルミが…この針を私に!!??

え、どういう事!? 誰か説明を!!

「ミルも気に入ったようじゃな。言うまでもなく、合格じゃ。よかったのう…お主もこれで自由の身じゃ」

自由…ああ、なんて素晴らしい言葉なのだ。

「ウオ……ウオッシャー……!! 生き残ったぞおー」

――」

周りの視線など気にせず叫んでしまった。

今日ほど、生を実感した日はないだろう。目から心の汗が止まりません。

「そういえば、お前さん。像作成の報酬を全くもらつたらんそうじやの…折角だからこれをやろう。もし、殺したい奴がいたら4割引で引き受けてやろう」

ゼノが懷から名刺を取り出して私にくれた。

4割引…むしろ、9割引位にしてくださいよ。確か、ひとり殺すのに10億位でしょう？ 私のような一般人が貴方のようなプロを雇えるはずないでしょう！！ などと言えることもなく素直にお礼を言った。

金では買えないコネと言うのは、非常に大事だからね。

「ありがとうございます！！ 機会があれば是非ご依頼させていただきます。 それでは、今日まで約二年間お世話になりました。実家に帰り、ハンター試験を受けようと思いますので これにて失礼致します。…後、帰りにミルキ様のお見舞いに行きたいのですが、どちらに？」

キルアの母親が執事を呼んでくれた。

私は、執事に連れられて部屋を退場しミルキのお見舞いに行った。

こうして、約二年間お世話になったゾルディック家を生きて帰れる事になった。お土産は、地元で売っていたゾルディック饅頭などの地元のお土産を沢山買って帰ったよ。

後、見舞いに行ったミルキから像の報酬のおまけと言って、とても重い箱をくれた。中身がなんなのかは知らないが、きっといい物に違いない。

キルアの野郎には、感謝しねーとな。

レイアが実家に帰る前に手ブラでお見舞い着たので即興でフィギュアを数体作らせた。完成度は、相変わらず高い。しかも、短時間で2体のフィギュアを塗装有りで作り上げるとは思ってみなかった。

なんでも、魔法少女をモチーフにしたらしい。暇だったので、どんな魔法少女か聞いてみたら、脱げば脱ぐほど早くなる金髪ロリ幼女と白い悪魔と呼ばれるロリ幼女が周りの迷惑や物的損害を度外視した超絶バトルを繰り返す話らしい。

俺の直感が正しければ、これは儲かる。

『ワジマか、お前は確かジャポン出身だったな？ちよっと、やって欲しい事がある』

『何でも、お申し付けください』

『実はな…』

ワジマに命令した後に俺は、レイアから聞いた話にちょっとした要素を取り込んだ話を書いた。

二ヶ月後の深夜にジャポンで社会現象を巻き起こすアニメが放映されたのであった。その内容は、こんな感じだ。ロリ幼女の鞭打ちシーンや非殺傷とは名ばかりの殺人的魔法戦を繰り返す超弩級の変態アニメと言ったところだ。

タイトル：「魔砲少女 本気^{マジ}狩る なのは」

原作：レイア

監督：Milky

シリーズディレクター：Milky

シリーズ構成：Milky

脚本：Milky

キャラクターデザイン：レイア

音楽：Milky

アニメーション制作：ボルビック

レイアの知らないところで名前が売れるレイアであった。

第8話（後書き）

これにて、プロローグ完了です。

最後まで読んでいただき有難うございます。

次章からは、ハンター試験編です。

きっと、ゾルディック家での経験が役に立つに違いありません。
レイアが合格することを願っておいてください。

しかし、最終試験どうしようかな…

第9話（前書き）

ハンター試験編に突入しました。

第9話

先月、黄泉の国と言っても過言でもない場所から生きて生還を果たし16歳になったレイアです。

とうとう、原作クラピカと同年代になってしまいました。だが、ゴンやキルアと同年代じゃなくて本当によかった。あんなのと比べると萎えるからね。

そして、今日はハンター試験当日！！

両親には、記念受験だから一度だけ受けさせてくれとなんとか説得した。今こそ、道場やゾルディック家での成果が実る時なのだ。

そして先日、二年ぶりに道場に遊びに行って師範代とお話してきました。師範代曰く、運が悪くなければ合格するだろうとお墨付きをいただいた。恐らく、運が悪いというのは念能力者が相手の対戦試合や知識を問う試験でなければといった感じだろう。

まずは、第一関門。

何処にでもあるような定食屋の中へと入った。

「ステーキ定食」

定員の顔つきが微妙に変わった。

「焼き加減は？」

「弱火でじっくり」

ふふふ

事前試験をやらずに一気にここまで来られるのは転生者の特典だな。マトモにやっても、たどり着けるかもしれないが…それは、ゴン達と同じルートを辿った時限定の話だろう。他のルートで来る場合は、どんな試験があるかわからんからね。

奥の部屋に案内され、ステーキ定食を食べつつしばらく待つと地下100階に到着した。

食事を終えてエレベーターから降りるとそこには、むさ苦しいオッサン達で満たされていた。だが、10年心源流拳法道場に通いゾルディック家で二年間過ごした私にとって、この程度の雰囲気には飲まれはしない。

「これがあなたの番号札です」

係員から420番の札を渡された。

なぜ、こんな試験会場やキーワードも知っているのに来るのが遅かったのには理由がある。可能な限り目立たない為、一次試験開始直前に到着したかった。後、ゴン達の番号札をずらすのは得策じゃないと思ったからだ。下手したら、私がヒソカの番号札を狙う事になりかねないからね。

ヒソカの番号札を狙うとか考えただけでゾツとするわ。

「新顔だね 君」

背後から人柄の良さそうな小太りの中年男性が話しかけてきた。

ト、トンパきたー！ー！ー！！

私は、お前を待っていたのだよ！！

「ええ、今年はじめての受験です。よろしく」

「ああ、こちらこそよろしく。俺はこうみえて35回もテストを受けているから分からない事があつたら何でも聞いてくれよ。後、これはお近づきの印」

トンパがカバンから缶ジュースを取り出して私に差し出してきた。私は、それを受け取ると同時に小型の発信機をトンパに取り付けた。この死亡率の高い試験を何度も受験して生き残っているお前を私は高く評価している。要するにだ、お前に着いて行けば死ぬ事はまずない。おまけに、今回に限っては4次試験まではトンパがたどり着く事も知っている。

私の為に頑張って生き残ってくれよ。

「ありがとう。私は、少し疲れたので コレでの飲みながらあちらで休ませてもらうよ」

「ああ、ゆつくり休んでくれ」

隅っこに行き、ジュースを捨てた。始まる時間までは、持っていた荷物の手入れをしておこう。いつ何とき使う事になるかわからない

からね。

数分後。

「ぎあああーっ」

はっ！！

悲鳴がした方を見ると、ヒソカが腕を切断してシーンだった。もうそんな時間か…ならば、今からでも準備運動を開始しておこう。

更に数分後。

「では これよりハンター試験を開始いたします。どうぞこちらへ」

夢にまで出たハンター試験がいよいよ始まった。この試験をクリアしない事には、何も始まらない。

待っているよ ピトー！！ 必ずお前を手に入れてみせる。

ザザザザザ

400人近い人数が一斉に移動を開始した。

ここでは、まだ発振器の出番ではない。迷う事の無い一直線の通路だからね。後は、自分のペースで踏破するのみだ。昔の私なら100km近いマラソンなど不可能だったが…今は違う！！

ありがとう 心源流拳法道場！！ ありがとう ゾルディックの執事の人達！！

涙で汚れた枕カバーを変えた回数は数知れないが、今だけは感謝してやるぞ。

おっと、あまり妄想にふけっていると遅れてしまうな。自分のペー
スを守るのも大事だが、何より、主人公一行と同じペースというのが一番ダメだ。原作組と仲良く行動しては、ハンター試験後に再びゾルディックに行く事になりかねない。だから、一定の距離を保つべし。

気合を入れる レイア！！

パン

自分の両頬を叩き 活をいれて、ゴール目指して走り出した。

数時間後。

ようやく、階段まで到着した。流石に、毎日鍛錬していても ここまで走るのは結構体力を消耗した。原作キャラ達は既に登り始めているのを後ろから確認したので、私は自分のペースを守りつつ登りきるまでだ。

さあ、頑張るぞ！！

登り始めて数十分後。

上に登るにつれて、体力切れでくたばったように休んでいる連中を何人も見てきた。正直、実力不足な人達は、ここで脱落しておいたほうが幸せだろう。これからの道は、死亡率が跳ね上がるからね。

お！！

上の方から光が見えてきた。

「到着…つと」

ふう

登りきった先には、既に受験者が沢山いた。どうやら、私は最後尾に近かったようだ。おっと、次の試験が始まるまで休んで体調を整えておこう。ここからは、試験官であるサトツのペースに付いていかねばならないからね。だが万が一見失った時には、この発振器が役に立つ。

水分補給をして少し休んでいると辺りが騒がしくなってきた。

そして、一匹の猿が死んだ！全く、キモイ生態系だな。改めて、○樫ワールドに生存する生き物の生態系に疑問を感じた。もつとも、そのような生態系でなければ、私のピトーも現れないのだけだね。

「それでは まいりましょうか。二次試験会場へ」

立派なおヒゲの試験官が走り出した。私はすかさず、試験官の真後ろと陣取った。命懸けのマラソンだ。ここだけは、自分のペースが乱れようと決めて離れまいと心に誓った。だって、死にたくない

もん。

30分後。

ふっ…分かっていさ。

迷子になりました。気が付けば、目の前にいた試験官が居なくなり左右にいた受験生も消えていた。どうしてこうなった…最前列を常に走っていたのに、後ろの方で悲鳴が聞こえた為、一瞬振り返ってしまっただけでこの有様だ。流石は、詐欺師のなんとやら…。

だが、ここで諦めるレイアではない。ちゃんと、こういう時の対策として熟練受験者^{トンバ}に発振器を付けているのだから。まだ、そう離れてはいないはずだ。

私は、発振器の目標の位置を確認した。

ザザザ!!

その瞬間、横の茂みから76番のプレートを付けたおっさんが飛び出してきた。

・
・
・

「チエスストーリー!!」

ドゴン

私は、76番の男の懷に飛び込んで手加減無しの正拳突きをお見舞いした。この12年間、ハンター試験の為に修練を積んできた私の腕力は、試練の門を二の扉まで開けられる程に成長している。そのような腕力を持つ人間の拳をいきなり食らった人間は、あたりどころがよくて悶絶するだろう。

「ぐうううううえええええー」

「悪く思つなよ」

76番が苦しむ中、私は早々にこの場を立ち去った。

傍から見たら私が悪人に見えるかもしれないが、それは大きな誤解だ。私の記憶が確かなら、76番はヒソカから逃げ出してきた一人だ。要するにだ、76番がこっちに来たということはヒソカが私の方に来るといふ事だ。RPGで言うならばMPKモンスタープレイヤーキラーと言つてもいいだろう。

マジで迷惑だ…死ぬなら一人で死ね。

よつて、私はヒソカに生贄を差し出し逃げる事にする。そう、全力で！！人間命懸けになれば信じられない力を発揮するというのが今がまさにそうだ。この足の速度ならば、ミケの餌当番になっても捕食される事は無かつただろう。

10分後。

「はあはあ」

一心不乱に走り続けたおかげで、全身汗だくになった。しかし、おかげで生き物に騙されることなく二次試験会場へと到着した。

「の、のどが渴いたぜ」

本当ならもつと楽にこられるはずだったが、ヒソカ絡みはやはり不確定要素が多いな。だが、ヒソカに目を付けられないだけ僥倖と言える。全く、自分の才能のなさに感謝したい位だわ。

第9話（後書き）

内容は、漫画に沿っていいと思います。

第10話

現在、二次試験真つ最中のレイアです。

勿論、お題は「豚の丸焼き」だ。しかも、二次試験会場のビスカの森にいる豚は世界一凶暴と言われている程だからタチが悪い。本当に、試験官はいい性格をしている。

「さーて、豚は何処かな」

さつきから、探して入るのだが…一向に豚が見つかりません。正直、ここの豚如きには遅れを取る気はないのだが、そもそも獲物がいないとか酷すぎる。

それでも、ブ…じゃなかったミルクとは仲がいい？から豚ともお近づきになれると思ったのにな。

ドドドドド

少し離れた場所で地響きがした。

これは、間違いなく豚の足音だ。私は、すぐさま足音がする方向へ走った。辺にいた受験者も同じ獲物を狙っているようで一気に集まってきた。

私が、現地に到着した時には既に豚達は壊滅状態だった。ゴン達が豚の弱点を大声で叫んだせいで全員が急所狙いで一網打尽にされている。

なんてこった。

しかし、まだ豚は残っている。辺りを見回して、なんとか受験者の餌食になっていない豚を発見した。ほかの受験者より早く、そして確実に仕留める！！ 豚目指して一直線で走った。

豚も私に気づいて突進してきた。

自ら、倒されに来てくれるとは、ありがたい。せめて、苦しまないよう一撃であの世に送ってやろう。拳に力を込める。

「未来の為に死ねー」

トストストス

ドーーーーン

私の拳が豚に届く前に、はるか後ろから何かが投擲された。その形状は、ヒジョーに身に覚えがあり、かく言う私も一つ所持している。決して、忘れていたわけじゃないが…出来る事なら不干涉で貰きたかった。

「二ヶ月ぶりですイ…ヒイ」

「……………」

振り返り挨拶をしようと思ったが、名前を言おうとした瞬間 自分が死ぬシーンが見えた。なにやら、口を力カクカク動かしているが何を言っているかわからない。だが、名前を口にするなという事だ

ろう。

そして、イルミは私の獲物だった豚を持ち去って行った。

・
・
・

「私のブタさんが…こうなりや、最終手段だ」

既に豚の軍団は壊滅、これから新しい豚を探すにしても時間がかかる、試験官が食べられる数には限界がある。

ならば、取る手段は一つ！！

二次試験会場にて。

会場には、豚が焼けるいい匂いが充満している。

私は、その中で獲物を探していた。言うまでもなく、豚を横取りする相手をね。今回の試験は、豚の丸焼きを試験官に食べさせる事だ。その過程までは、指示されていない。

やはり、全員が豚を一人で狩る事が出来るのでそれなりに腕が立つ。その中から、私の実力で確実に排除可能で、騒がれない人物に目を付けた。

私は、気配を殺して背後に回り込んだ。そして、一気に首を締めた。

ギリギリギリ

「安心しろ。殺しはしない…ただ、試験が終わるまで寝ていてもらおう」

「ふざ…あ」

ドサ

締め落とした受験者を森の中に隠した。

どうせ、この受験者は最後まで残れないのは明白。ならば、未来ある私がそのチケットを有効活用させていただこう。

さて…いい具合に焼けたし、試験官様にご馳走しに行くでしょう。

二時試験会場のプレハブ内で。

いやー、それにしても本当に70匹の豚の丸焼きを食べるとはね。一体どんな、念能力なのだろう。もしかして、王と同じ食べる程強くなるのかじゃないよね？

「あたしは、ブラハと違ってカラ党よ！！ 審査も厳しくいくわよー」

厳しくね…ハンゾーのせいで怒ってしまい誰も合格にならないから、厳しかろうと優しくろうと関係ないのだけだね。一応、表向きは頑

張っておこう。

「二次試験後半、あたしのメニューはスシよ！！」

ザワザワ

ほとんどの者が顔を傾げている…無論、私も演技をかねて傾げておいた。目立つのは得策じゃないからね。

「それじゃ、スタートよ」

全員が一斉に厨房に走った。

さて…私は、どうしようかな。無駄な努力をするのも気が引ける。かといって、何もしないと試験官に怪しまれる。ならば、適当に料理を作ってこの場を乗り切るかな。

「えーと、冷蔵庫には何が入っているかな…」

調味料、野菜、果物、肉と結構マトモな材料が揃っている。当然の事ながら、魚は入っていない。

おろ…なんだ いい物があるじゃない！！

素材の中に卵を見つけた。

寿司といえば、一般的には魚だが…前世では、天ぷらとかカルビとか色々な寿司ネタがあった。当然、そんなお寿司は邪道だと思う。しかし、卵だけは別だと思っている。卵のお寿司美味しいからね。

それに、卵焼きならばお母様と一緒によく作ったな。味付けが母とそっくりとお父様も褒めてくれた。一般家庭の料理程度では満足しないだろうが…まあ、作っておいて損はないだろう。

数分後。

「魚あ！！ お前 ここは、森の中だぜ！！」

私が、黙々と卵焼きを作っているとレオリオの大声が聞こえた。

あいつ絶対狙ってやっているだろう。わざわざ、ヒントを大声で叫ぶとかどうかしてやがる。それにつられてハンゾーも過敏に反応したのがマズかったのだろう、受験生が一斉に外に飛び出していった。

そして、私一人だけ残された。

「これで完成と…」

出来上がった卵焼きを綺麗に切って、ご飯の上に載せた。忘れずに海苔も巻いておいた。安っぽいお寿司だが…これも間違いなくお寿司には間違いないだろう。

誰もいないうちに一度くらい味見してもらっておこう。やる気が無いわけじゃない事をアピールしておかないとね。

「お待たせしました。これがスシです」

「へーあんたは、魚だけがスシじゃないって知っていたんだ。本当なら、魚が良かったのだけど、まあいいわ 試食してあげるわ」

ここの生態系の川魚を所望するとは、なかなかゲテモノ好きなんだなこの人。

メンチが私のお寿司を掴み口へと運んだ。

モグモグモグ

「まるで、ダメね。スシを知っていた事は評価するけど、料理の腕前が全然ダメね。そもそも、スシの卵焼きと言うのはね……………」

・
・
・

な、長い…なんで、卵焼き一つで3分以上もお説教を受けないといけないのだ。そんな、素人同然の連中が作った料理にこの人は何を求めているのだよ。

「よって、不合格よ。作り直していらっしやい」

「了解です」

予想通りとはいえ、不合格。

まだ時間もあるし、他の受験生を見習って魚で寿司を作ろうかな…いや、確かこの後ネテロ会長が来るよな。ならば、メンチの裸婦像でも進呈すれば喜ばれる事は間違いないだろう。

この試験を通過できれば時間は、たっぷりありそうだし… 1 / 10

等身位の像ならいけるだろう。今のうちに、じっくり観察させてい
ただきましよう、その肢体をね。

きつと、完成品をプレゼントしたら印象値が上がり最終試験で対戦
回数を多く割り当ててもらえるだろう。

俄然やる気が出てきたぞ！！

第11話

外でちょうどいい木材を拾って帰ってきたレイアです。

「まずいわ！！ 作りなおし！！」

どうやら、私がない間にハンゾーがメンチを怒らせてしまい。審査内容が洞察力や観察力から味をみる事になってしまったようだ。美食ハンターのメンチの舌を満足させられる人間なんて、両手で足りる程しかないだろう。

要するに、この試験は詰みだ。

まあ、そんなわけで今後の展開を知っているので隅っこでフィギュアでも彫ります。うーん、メンチは思った以上に胸があるからな…イイ躰をしているな。ネテロ会長がイヤラシイ視線で見るとも頷ける。

まあ、私はピトー以外 興味は無いけどね。

さて、ネテロ会長の為に力作を作るとしましょう。荷物からベنزナイフを取り出し、作業に入る。このナイフ地味に切れ味がいいんだよね。流石は名品だわ。

10分後。

「わりい！！ おなかいっぱいになっちゃった」

どうやら、試験が終わったようだ。でも、考えようによっては無理もないだろう。受験者が作ってきたあれだけの寿司を一応は食べているのだから、そりゃ腹もいっぱいになるわ。

しかし、受験者の中に寿司を知っている人物が居ない事を前提とした試験も微妙だけどね。一応、いた場合の事も想定して試験をやるべきだったよね。

性別で差別するわけじゃないけど…女性って感情的になりすぎる。もう少し、理論的に行動して欲しい。

「二次試験後半の料理審査は、合格者0！！よ」

ザワザワ

周りがどよめき出した。

何年も修行を積んで死ぬ思いで二次試験まで来て、お腹がいっぱいだから全員不合格ね。では、納得いかないだろうね。無論、私も原作を知らなければ納得など出来ない。知っていても理解はするが納得はしないけどね。

「ふざけんじゃねエー！！！」

あ…受験者の一人がメンチに喧嘩を売りに行った。

我々、全員の気持ちを代弁してくれた君に感謝を込めて私は十字架を切った。せめて、五体満足でありますようにと…。

パァーーン

見事に場外まで吹き飛んだ彼は、地面に落下した。痙攣している事から、死んではいないようだ。

この時、私の頭の中には「無茶しやがって」のAAが横切った。

さて…今のイベントがあったという事は、もうまもなくか…。

数分後。

『それにしても合格者の0はちとキビシすぎやせんか？』

ドォーーン

上空に居る飛行船から、ネテロ会長が落ちてきた。

あの高さから落ちてきて無事とは…念能力者とは怖いな。生身で大気圏突入とかも出来るんじゃないかと思ってしまうよ。

ジーーーー

それにしても、恐ろしい程 鍛えられた体をしているな。ゾルディック家の爺といい勝負だわと思った。流石は、行きつけの掲示板で有名な「世界最強の魔法使い」と言われている事だけはある。

ちなみに…私のネテロ会長の評価は、前世と今ではだいぶ変わった。前世は、「世界最強の念能力者」だと思っていたが、ここ数年は「世界最強の魔法使い」という認識に変えた。

皆様も当然、ご存知のようにこの世界でも男性が30歳まであるモノを守り続けると魔法が使えるようになる都市伝説がある。ある魔法使いの証言によると「僕にしか見えない幼女が現れるようになった」と言っている。そんな馬鹿げた記事を見ていると100年以上もあるモノを守り続けた人物が書き込んだ記事を見つけた。その人は、自分より遥高みにいるのは「ハンター協会の現会長だ」と言っていたのだ。一般人ならこんな妄言ばかり書き込まれている掲示板など読み流すのだが…内容が内容だけに、私はある結論に至った。

ネテロ会長が長年生き続けている理由、念能力が極めて強い理由…それは、会長が「世界最強の魔法使い」だったからだと確信した。流石、○樫ワールドだ…信じられない法則が存在する…!!

おまけに、念能力が瞑想だけでなく妄想でも目覚めるなんて想定外だぜ。

「その受験生…さっさと乗らないと失格にするわよ」

え!?

気が付けば、みんな飛行船に乗り込んで移動する様だ。どうやら、メンチが説得されて試験内容がゆで卵になるようだ。

「乗ります 乗ります!! 待ってください」

移動すること10分。

ビューーーーーー

原作通り、クモワシの卵を取る場所まで来たのだが…想像以上に谷が深い！！はつきり、言いましょう…原作一行はキチガイだ。幾ら、谷底が川だからといってなんの準備も無しに飛び降りるなど狂気の沙汰だ。

何より、クモワシの卵がぶら下がっている糸が落下地点になればノンストップで谷底だぞ。既に、何人かの受験生が捕まる糸が無くそのまま落ちていつている。私は、飛び込むなんて無謀な事はしないぞ。

ロッククライマーが降りていった後を辿って降りる！！これが模範解答だ。

二次試験も勝利を確信して、ロッククライミングを始めた。

言うまでもなく、二次試験も難なく通過した。

原稿もスタジオも設備も完成した。

残るは…声だけだな。

『ワジマか、執事候補の女で具現化系か操作系の奴を何人か連れてこい』

『かしこまりました ミルキ様』

念能力で何人もの声色を出せる能力を作らせて、一人何役もやらせ

れば余裕だろう。他にも原画作成用に専門的な念能力を開発させたりもしている。

一度作った念能力は、普通破棄できない。生涯変える事が出来ない念能力を他人の都合で決めるのは、酷いと思うかもしれないがそれは間違いだ。

むしろ、救済してやっていると言っても過言ではない。

なぜなら、ゾルディック家の執事候補には高い能力が求められる。勿論、執事候補の中には能力が低い奴も存在する。能力の低い奴の末路は、ミケの餌と相場が決まっている。

レイアは、なんの肉か知らずに与えていたらしいがな…

俺は、そんな破棄されそうな人材に救いの手を差し伸べてやっているのだ。そんな訳で、俺は出来損ない共から神のごとく崇められている。

命の恩人でもあり、生涯食っていける職を与えてやっているのだから当然といえば当然だな。

『そういえば…レイアの奴は、今ごろハンター試験の真っ最中だったな。…イルミ兄いに殺されてなきやいいがな』

『そればかりは、ご武運を祈るしかありません』

今回のアニメが売れたら、またレイアにネタを提供させて儲けさせてもらうでしょう。

第11話（後書き）

次回は、三次試験に突入@@

PS：

更新が遅くてごめんなさい。

もっと書きたいけど…最近、リアルが忙しくて@@

もう、寝袋と会社で歯磨きは嫌です。

第12話

一人密室に閉じ込められたレイアです。

「ど、どうしよう…」

三次試験会場のトリックタワーに着いて、到着早々にタワー内部に入る為の入口を見つけたまでは良かった。まさか、私が入った入口が…「多数決の道」だとは想定外だ。これでは、四次試験でトンパが狩れない。

しかし、考え方を変えればこの部屋に入れば原作組と一緒に行動する事になるので三次試験合格はほぼ確実。下手に試験内容が分からない、入口に入るよりかは幾分かマシだという事もあるか。

三次試験を合格しない限り、四次試験なんて出来ないのだからここは前向きに考えるとしよう。原作組が来るまで作成途中のメンチ裸婦像でも作ろう。最終試験の面談時にプレゼントして印象値を確保する為にね。

数十分後。

ガコンガコン

扉の入口と位置を確認する音が聞こえた。

今まで、ひたすら原作組との遭遇を避けてここまで来たが、とうとう限界だ。決して、原作組が嫌いというわけではない。ただ、あい

つらと付き合つと幻影旅団とか命懸けの駆け引きが多過ぎる。

さて…裸婦像を見られると困るのでカバンにしまっておこう。

もしかして、私の今の立場って仲のいい四人組に見知らぬ一人が加わったトンプ的ポジションじゃないか。そうになると、最初の死刑囚との勝負でやはり先発を切って信頼を買うのが一番かな。

ストン

「…」

「って!!」

「…」

「…」

降りてきた全員が何やら微妙な顔をしている。

まあ、盛大な別れを告げて僅か数秒で再開したのだからわからないでも無いが…恥ずかしい連中め。

ジーーーー

やはり、キルアの身体能力は群を抜いているな。ゴンも現時点のキルアには劣るが、かなりいい筋肉だ。後、クラピカは…男だな。レオリオは…どうでもいいや。

「初めまして、私はレイアという。本来、敵同士の受験生とはいえお互い協力して三次試験を頑張ろう」

人間関係何事も挨拶が肝心だ。先手を打って挨拶をする事で相手に

好印象を与えておくとしよう。

「俺は、ゴン!!」

「クラピカだ、こちらこそよろしく頼む」

「レオリオってもんだ、よろしくな」

「キルア……アレ、あんたどっかで……」

キルアが私の事をうつすらではあるが、覚えているようだ。できれば、知らないふりをして欲しかった……最終試験後にゾルディック家に同行させられない為にも気を利かせてください。

「二年程前に、一度だけ……像を作りに」

「ああ!! あの時のアンタか……よく生きていたな。正直、死んでいると思ってた」

言われずともよく生きていたと思うよ。

もう、ゾルディック一家と執事のせいで枕カバーがどれだけ犠牲になったと思っていやがる。などと強く言えるはずもないので、素直に笑ってごまかした。

「キルア、知り合い？」

「仕事先のお客様です!!」

ゴンが無邪気な顔をして恐ろしい事を言ってきたがった。回答によつては、人生のターニングポイントなりかねない。

ゴン……なんて恐ろしい子!!

「まあ、そんな感じだね」

キルアの援護により、この話題はここで終了した。

空気が読める子って、素晴らしいよね。

こうして、四人と一人の微妙な関係の集団が三次試験をスタートさせた。

第一の試験。

予定通り、雇われ試験官との対戦です。

やはり、トンパ同様にここは私が先手を打つのがいいだろう。

「何でも有りのルールである以上、相手が何をしてくるか分からない。ここは、私が先手で味見をしてこよう。それに、君たちは私の事を信頼しきっていないだろう？ そんな奴に、二勝二敗になった場面で登場された日には目も当てられないだろう」

「た、確かにな…だが、あんた大丈夫か？ 相手は見るからに強そうだぞ」

強そうね…軍人ならあのくらいが基本でしょう。ゾルディックの執事に比べれば雲泥の差で笑えるわ。

それに、真っ向勝負などそもそも考えてないので心配無用だ。ミルキより貰ったブツをついに使う時が来たか。如何程の威力か試させ

てもらおう。

「問題ないさ。何でもありなのだろう？」

満場一致を確認して、私はリングに上がった。

「勝負方法を決めようか 俺はデスマッチを提案する！！ 一方が負けを認めるか、死ぬまで戦う」

原作キルアの言うとおり、喉を潰して時間いっぱい拷問でもする気だろうね。

「その提案受けよう」

「その覚悟 見事！！ それでは、勝負！！」

ハゲ軍人が、突進してきた。

ハゲの行動と同時に私は、懐から愛用品のミルキ特製のよくわからない合金で出来たデザートイーグルを構えた。言っまでも無く、弾丸はダムダム弾仕様だ。重さは、約70kg近くあるから球切れになっただけは鈍器でも使える。

「ちょ……」

ハゲも私が何を持っているかに気づいたようだが、既に遅い！！

「さようなら」

囚人相手に情けなど不要。むしろ、被害者の親族達からしたら寿命

より長い刑期を与えるよりスッパリと死刑にして欲しいに決まっている。

私は、躊躇無く引き金を引いた。

ドゥーーーン

プシャーーーーー

弾丸は見事にハゲの頭を貫いたようで…見事に頭部が消し飛んだ。そして、背後にあった壁にまで球が届いた様だ。

良い威力だ。

「これで、私達の一勝で問題ないね」

電子プレートに「1」と表示されるのを確認して、自軍の位置に戻った。

「銃を持っているなら先に言えよ…負けるかヒヤヒヤしたぜ」

恐らく、銃が無くても勝てただろうが…わざわざ、手の内をばらす必要はないだろう。最終試験では、レオリオと戦う可能性が濃厚だからね。

「その銃…兄貴の特製だね。意外だな…あの兄貴が他人に物をやるなんて」

「やっぱり、わかるんだ。お互い持ちつ持たれつの関係ですよ…多分」

さて…これで勝利したから、残るは二勝。

記憶だとゴン、クラピカの順で試合が進むはずだから勝利は確実だな。

さて…銃のメンテナンスでもして試合が終わるのを待とうかな。この調子ならば、時間内にクリアも可能だろう。

道を開けるふりをして襲い掛かってきた殺人鬼を目に止まらない速さで心臓を抜き取ったキルア程に無いにしろ、レイアと名乗る青年も危険だな。

身のこなしをなどからもわかるが、長年何かしらの武道をやっていたのだろう。おまけに、殺傷力が極めて高い拳銃まで持ってきている。今後の試験内容次第では対策を考えなければならんな。

「手が止まっているよ クラピカ」

「すまないゴン」

だが、今は感謝しないと…こうして全員が合格する為のアイデアを提供してくれたのだからな。

それにしても、厚い壁だな…いつになったら反対側に出るのだ。

第13話

三次試験を楽勝に通過したけど、絶望のどん底に居るレイアです。

「はぁ…ありえないよ」

4次試験は、島全体を使ったサバイバルゲーム。自分の番号札は3点、自分のターゲットの番号札も3点、それ以外は1点と計6点を集める極めて単純なゲームだ。

しかし…ここで問題が発生した。

私のターゲットが301番…イルミなのだ。正直、自分のくじ運のなさに絶望したよ。原作では、女スナイパーがイルミを狩る者だったのだが…やはり、トンパの代わりに私が三次試験を合格したのが原因なのだろう。

誰がターゲットになってもいいように、番号札に対応した人名をしっかりとメモをしておいたのに無駄な苦勞になった。いつそう、いもり三兄弟だっけ？ あいつら全員を狙うのも有りだが…キルアのターゲットとハンゾーのターゲットに手を出すのも死亡フラグな気がするしな。

ここまで来て落ちるわけには行かない…最終手段を使うしかないな。携帯を取り出して、私の数少ない変態と言う名の友？に電話を掛けた。

『レイアか、ハンター試験合格したか？俺は、今わりと忙しい

から手短に要件を言え」

「フィギュア5体を作成するから、イルミ様が付けている番号札を譲ってもらえるように交渉して欲しい。ついでに、今試験を受けている全員の番号札と名前も提供する」

「…そのフィギュアは、期待していいんだな？」

「無論だとも、私を誰だを思っている？」

軽音学部に所属する少女達のフィギュアとそれにまつわるストーリーもつけましよう。ミルキならその価値が分かってくれるはずだ。

「詳しい状況を説明しろ」

ミルキがこちらの交渉に乗ってきてくれた！！これで百人力だぜ。私は、試験内容と受験者の名前を提供した。後は、神に祈って待つばかり…。

待つこと数十分。

なんの音沙汰もなく、島に着いてしまった。一体、何をしているのだ ミルキ！！ポテチなんて食っている場合じゃねーぞ。

「滞在期間はちょうど一週間！！その間に6点分のプレートを集めて また この場所に戻ってきて下さい。それでは、一番の方スタートしてください」

ヒソカがニヤケ顔で出発していった。続いて、イルミも出発してい

った。

おいしい！！

まさか、ミルキがしくじったのか…一体、私はどうすればいいんだ。こうなれば、ポツクルに狙いを定めるしかないか。

携帯を開き連絡を待っていると…出発の番が来た。

「絶対に生き延びてやるーーー！！」

荷物を背負い、森の中へと進み身を潜めた。

やはり、狙うのならばポツクルが自分の獲物を仕留めた直後がいい。そうすれば、二点分のポイントがGET出来る。そうなれば、後はキルアが捨てるはずの三兄弟の番号札を狙おう。

それに、ポツクルがここで死ねば…将来的にキメラアント陣営の成長を遅らせる事も可能であろう。

さあ、いつでもスタートしてこいポツクル！！

ポツクルの尾行を始めて3時間。

ゾルディック家での経験が活きる！！

森の中での移動方法や気配の消し方などはワジマさんから習っていて正解だった。ありがとう、ワジマさん…今度、御歳暮送ります。

ポツクルの動きが止まった。

原作通り、人の背の丈程の高さのある草原地帯で自分の目標に止めをさすようだ。私の狙いは、ポツクルが相手の番号札を手に入れて安堵した その一瞬だ。

近くでゴンも見ているかもしれないが、邪魔をしない事は分かっている。構う必要はない。私は、辺りが見渡せる木の上に登り銃口をポツクルに合わせた。動く的に当てるのは下手だが…止まっているのなら外さないぞ。

ポツクルが弓を構て…放った！！

ポツクルのターゲットは、致命傷は避けたが…予定通りしびれ毒で麻痺っている。

「水場は、すぐそばにある死にはしないさ」

そうだな 死ぬのは、お前だからね。さような…

ソワリ

引き金を引こうとした瞬間、良くない感じがした。直感的に、頭を引いた。

ドウウーーーーーン

私が今まで頭のあった場所を何かが通過して後ろの木に直撃した。

くっそ！！ どうみても狙撃です。

ポツクルの番号札は惜しいが…今は、身を隠して逃げるしかない。
恐らく相手は、狙撃銃を使う女スナイパーだ。原作ならイルミを狙
って返り討ちに会うはずのヤラレキャラだが…くっそ、どこまでも
想定外の事が起きやがる。

ドウウーーーーー
ドウウーーーーー
ドウウーーーーー

私が木から降りて岩陰に隠れたのをいい事に逃げられないように釘
付けにしてきやがった。しかも、この銃の威力が高いせいで岩がど
んどん削られる。このままでは、隠れる場所がなくなってそのまま
餌食になってしまう。

相手の弾切れを願うが…そんなミスをスナイパーがやらかすと思え
ない。

ドウウーーーーー
ドウウーーーーー

「まずいまずい…まじで死ぬって!!」

ぎゃー、どんどん岩が削られていく。

逃げ出そうにも一歩たりとも動けないでござる。私の番号札を差し
出せば見逃してくれるだろうか…いや、私が相手だったら確実に排
除しておくだろう。この試験の特性上 一週間以内ならば巻き返し
が可能である為 ライバルを減らす意味でも生かしておくのはナン
センス。

シューーーン

後、数発で岩が崩壊しそうになったが…一向に打ってこない。まさか、弾切れか！？ それとも、私が逃げるのを狙って撃ち殺す気か！？

どちらにせよ、安全が確認できるまで動けません。あと一步でポツクルとそのターゲットの番号札を手に入れられたのに…踏んだり蹴ったりだ。

ザザザザ

誰かが近づいてくる足音がする。

まさかと思った瞬間、私の頭上を針でめった刺しにされた女が通過した。

ドザン

イヤッホーーーー！！

流石は、ミルキ様だ。必ずやってくれと信じていましたよ。

「ついでだから殺しておいた。後、これミルキから依頼品」

イルミが胸についている番号札を私にくれた。これで、私は6点分揃ったぞ！！ 後は、奪われないように守るだけ。

「ありがとうございます ギタラクル様」

・
・
・

…あれ？

イルミの胸に何故か、ポツクルの番号札をそのターゲットの番号札が付いている。…見なかった事にしよう。きっと、ポツクルは遅かれ早かれ死ぬ運命だったのだろう。私がこの世界に来た事でそれが少し早くなっただけの事だ。

イルミが立ち去っていった。

まさか、フィギュアがハンター試験合格のキモになるとは思ってもみなかったな。さて…後は、海岸近辺で洞窟でも見つけて箆ろう。ヒソカとハンゾーの活動圏外なら何とでもなるしね。

この時間を有効活用して、メンチ裸婦像を完成させておくぞ！！
折角だから、ネテロ会長の像も作って合体出来る仕様にしようかな。
二つで一つの幻のフィギュアの誕生だ！！

第14話

海岸の小さな洞窟の中でひたすら、フィギュアを作っているレイアです。

「か、完成だ!!」

作成期間が短く、道具も無いので塗装まではできなかったが掘りを完成させた。何を完成させたかというところ…メンチ裸婦像とネテロ裸夫像の二体のフィギュアだ。しかも、普通のフィギュアと異なり一部の箇所が合体できるという特殊仕様!! 時代の最先端をいっている事間違いないだ。

それにしても、あまりに集中しすぎて七日という時間がまたたく間に過ぎ去ってしまった。恐らく、もうすぐ定刻の知らせがくるだろうから荷造りをしておこう。

早いところ、この寒い洞窟とお別れしたいよ。事前に、どんな試験内容だか知っていたから寝泊りセットや缶詰などの食料を持って来られたが…ほかの受験者は大変だろうな。

「さて、誰が生き残ったのかな…」

私というイレギュラーが居るため、もしかしたら原作通りの人物が残っていないかもしれない。現に、ポツクルはすでにご退場している。やはり、あまり活発に動く私の嫁確保計画にも支障をきたす可能性があるから自重しておく必要があるな。

ポツーーーーー!!!

『ただ今を持ちまして第4次試験は終了となります。受験生のみなさん 速やかにスタート地点へお戻り下さい。これより…』

どうやら、定刻のようだ。完成したフィギュアと某女スナイパーが使わなくなったライフルを背負い一週間お世話になった洞窟を離れた。

最終試験では、流石にスナイパーライフルを使う機会はないだろうが…今後、役に立つ機会もあると思って回収しておいた。ハンター試験の受験者だけあって、女ながら大口徑対物ライフルなんて持ち歩くなんてすごいな。正直、こんなのが人間にあたったら消し飛ばさず…。まあ、私が持っている銃もあり人の事を言えた代物ではないけどね。

ハンター試験合格まであと一步！！

気を抜かずに頑張るぞ。

スタート地点にて。

集まったメンツは、予想通りだった。

ポツクルの代わりに私がいること以外、全て原作通り。

「よお！！ あんたも残ったか」

「当然だ…と言いたいが、運がよかっただけさ」

実力で生き残れると思ったのだが…ターゲットがね。Lv1でラスボスに挑むくらいに無理ゲーだったからね。

「敵同士にかける言葉ではないが…お互い頑張ろう」

「ああ、あんたも頑張りなよ」

レオリオとたわいない会話をして別れた。

それにしても…キルアってなんでイルミの存在に気づかないのだろう。顔は確かに変わっているが、服装や針などはそのままだと言いたい。何年も兄弟をやっていて、気づかないのは正直どうかと思うのだけだね。

まあ、どの道 次の試験で気づくことになるのだけどさ…

『皆さん、おつかれさまでした。それでは移動しますので飛行船にお乗りください』

飛行船の中にて。

用意された私室に籠もり、拳銃とライフルをばらして綺麗に掃除をしております。いくら、見つからない為とはいえ海辺の洞窟はまずかったな…潮風で銃が痛む。拳銃の方はミルキ特製の為、サビひとつないが…ライフルの方は、非常に厳しい。

「もったいないが、破棄だな。やはり、道具はミルキ特製に限る」

重さもさることながら、一体何の素材で出来ているのだろうか。もしかしたら、ミルキの念能力あたりが絡んでいるのかな？

『これより、会長が面談を行います。番号を呼ばれた方は…』

遂に来たか！！

会長の為に作り上げた、渾身の新作をプレゼントするときだ。これで私の印象値はウナギ登り間違いなし。しかし、よくよく考えれば…キルアが自滅してくれるから印象値など関係ないのだがね。

えーと、原作ではなんて質問だったかな…。

「ハンターになりたい理由」「一番きになる相手」「一番戦いたくない相手」だったかな。

面接室にて。

部屋に入ってみると純和風の部屋でびっくりした。

会長が何処出身か知らないけど、恐らく日本覇肩している事は間違いないだろう。確か、「心Tシャツ」とかいうマジ勝負の時しか着ない服まであるらしいからね。

「落ち着きがあつて良い部屋ですね」

「ホッホッホ、若いのに分かるかい？まあ、座りなされ」

用意された座布団に座った。

うーん、どのタイミングでアレを出そうかな…万が一、この部屋が監視カメラとかで見られていたら確実にメンチが乗り込んで来てバラされそうだな。

キヨロキヨロ

「そんな、警戒せんでも監視などされておらんよ。まず、お主に質問じゃ。なぜ、ハンターになりたいと？」

ハンターになりたい理由…そんなの念能力が欲しいからです…！など口が裂けても言えないな。裏試験の事を知っていて受験しているなんておかしいからね。

いや…違うな。そもそも、念能力が欲しいからハンターになりたいわけじゃない。私は…

「愚問です…嫁を手に入れる為です」

「…はて、私も耳が遠くなつたかの…。今まで聞いた事がないような理由が聞こえたわい。すまんが、もう一度言ってくれんか？」

何度でも言つてやる…！

「嫁を手に入れるためです…！（キリッ）」

何やら会長の目が私を哀れんでいるように見える。いやいや、きつと私の思いのたけに感動をしたのだろう。

「色々と辛いだろうが…がんばりなさい。次の質問じゃ、8人の中

で一番注目しているのは誰じゃ？」

よくわからないが…言われずとも頑張りますよ。

「注目ですか…やはり、405番ですね。他にも注目している人はいますが、405番が秘めている才能が凄まじく高いのが要因ですね」

私の嫁を将来的に殺害する天敵だ。ヒソカやイルミ、キルアなども当然注目しているが、私にとって一番の注目は君ひとりだ。

「ほう…。では、あの中で一番戦いたくないのは？」

「44番！！ 301番！！ 99番！！ 294番！！」

一番など決められるはずもない。だけど、命の危険が高い順に番号を並べた。もちろん、今挙げた誰もが私より実力が上で勝てる見込みも0だと言ったこともある。

「いや…一人なんじゃが」

「まあまあ、そう言わずに…コレを」

私は、即席で作ったプレゼントボックスに入れたフィギュアを会長に差し出した。言っておくが、賄賂じゃないぞ！！ 尊敬する魔法使いへの贈り物だ。

「何のつもりか知らぬが、賄賂を贈っても無駄じゃぞ。とりあえず、お主が一番戦いたくない相手は最初に挙げた44番にしておくわい」

「ケチでも、会長のために丹精込めて作った私の作品は受け取ってね。調べたらわかると思うけど、一応私のホームコードも付けておいたから」

心残りはあるが、私は目的を果たしたのでそのまま部屋を退場した。

翌日、会長のヒゲと髪の毛が何やら鋭利な刃物で切断された。一体、誰が会長を襲ったのかは定かではないが、身の程知らずもいるものだった。

全く、今年の試験は随分とキワモノが揃ったわい。

念能力が使えるあの二人は当然として、新人がここまで多い年は本当に珍しいの。全員が若く、将来が楽しみじゃわい。

新人と言えば、あの420番はどうやって301番の番号札を手に入れたのだ。念能力者でもない彼があれほどの念能力者から番号札を奪えるとは考えづらい。まあ、後で彼担当の者から話を聞けばよいか。

「それにしても、あそこまであからさまに賄賂を送ってくるとはな……わしの為に作ったという位だから手作りなのだろう。どれ、ここは一つわしが採点してやろう」

420番が置いていった箱を開けてみた。

「ほほう、これは凄いな」

二体の像を箱から取り出した。今まで名品と呼ばれる品物を沢山見てきたが、この像もワシが見てきた名品と勝るとも劣らぬ良い作品だ。美術館に飾られていても何ら不思議でない作品じゃわい。

少し荒削りな箇所はあるにしても、何よりこの像に込められているオーラがとても美しい。作った本人は、念能力者でないのだから無意識にやっていたのだろうな。

99番と405番同様に別に意味で将来が楽しみじゃわい。

ただ…

「なんで、ワシとメンチ君がモデルなんじゃ…しかも、裸婦像」

こんなのがメンチ君に見られたら、三途の川行きじゃぞ 少年。しかも、ワシの一部とメンチ君の一部が合体する仕様なんてものを見られたら、一族郎党殺されかねんぞ。

カポカポ

「ネテロ会長、最終試験のことであつと…」

ワシが像を合体させて遊んでいたところに、最悪のタイミングでメンチ君が部屋に入ってきた。

「メ、メンチ君…部屋に入るときはノックくらいせんか」

メンチ君がいつの間にか包丁を手にしていた。その包丁からは、一つ星ハンターに恥じない凄まじいオーラを纏っていた。

少年…これは、一つ實しじやぞ

第14話（後書き）

自分の知らないところで会長によって命を助けられたレイア…
やはり、合体仕様はまづかったか…

次は、最終試験です。

第15話

十分な休息と準備を整えたレイアです。

最終試験は、ありがたい事に面談から三日の猶予期間があった。その間に、一週間入れなかった風呂には入り、うまいものを食べて英気を養いました。無論、その間も日夜続けているトレーニングも忘れてはいない。一日の遅れを取り戻すのには二日かかるといえますからね。

後、両親にも最終試験まで残ったと電話をした。ハンター協会が受験生の死亡者を公式HPで公開しているらしく、生き残っているのは分かっていたが連絡をくるのを持っていたらしい。両親からも悔いが残らないように頑張りなさいと言われた。

さて…どんな組み合わせになるか楽しみだな。

最終試験会場にて。

おヒゲと髪の毛が微妙に変な形にカットされたネテロ会長がトーナメント表を発表した。無論、原作同様に一人だけ不合格になるあの形式だ。

「こ、これは酷い…」

トーナメント表をみて思わず声を漏らしてしまった。

運命の女神はどうやら私の事が嫌いのようなのだ。トーナメント表の並

び順から見ると限り、私の順位は下から二番目…要するに、レオリオより少し高い程度だ。まあ、それはいいでしょう。

問題は、私の相手がヒソカだということだ。

私は、ヒソカが一番戦いたくないと言ったのになんて仕打ち!!
ちなみに、ヒソカの印象値は下から三番目だ。この事からポツクル死亡分、全員が1個づつトーナメント表を左に移動した事になる。

ミルキに引き続きヒソカとか…どれだけ運がないのだよ。

幸い、キルアが原作通りにボドロを殺してくれるだろうからいいけどね。仮に、原作通りの事が起こらなくてもクラピカとレオリオと戦う事が出来るので負ける事はない。

その後、第一回戦のゴンVSハンゾーの試合が行われた。ハンゾーの身体能力は実に素晴らしい。念能力無しでも雑魚の念能力者なら殺せる程の力を持っているだろう。ハンゾーが相手でなくて本当によかったと思うよ。ハンゾーは、ゴン相手だからこそ拷問等の卑劣な事をしてこなかったけど…私相手なら迷わずしてくるだろう。

まあ、ハンゾーの残念な事に次の相手がポツクルでは無くキルアという事だ。

・
・
・

あれ?このまま進んだらキルアがハンゾーに勝利して合格してしまうのではないか。いや、違うな…仮にハンゾーを倒したとしても、他人

の試合に乱入して相手死亡させたら不合格になるか。

「第二試合ヒソカVSレイア！！両者 前へ」

私の悩みとは裏腹に…ノリノリの審判が私の名前を呼んだ。一応、ベンズナイフにミルキ特性の拳銃、イルミの針とそれなりの装備を揃えてはいる。だが、使う機会すら与えられないだろうね。力量が雲泥の差だ。

早く、家に帰りたいです。

「君かい…ギタラクルの番号札を奪ったのは？ 期待しているよ？」

変態が私の全身を舐めまわすように見ている。

私も負けずにヒソカの全身を観察してみたが…とある一部が無駄に膨らんでいる。

「目が目がああ〜」

試合返し前から、見たくはないものを直視してしまい思わず叫んでしまった。

まさか、試合前からこのような精神的ダメージを受けるとは予想外だった。女性相手に使うには非常に嬉しい特技だが…下手に男性相手に使うと目が腐る。今後は少し自重しよう。

「何をしている早く前へ！！」

しびれを切らした審判が怒り気味で私に文句を言ってきた。

しぶしぶ、ヒソカの前へと移動した。なにやら、ヒソカが期待半分といった感じて私を見てくる…なぜだ!?

ヒソカ程の実力者ならば、見ただけで相手の力量くらいわかるはず。それなのに、何故私をそんな目で見る。

・
・
・

あれ、そういえばさっき…「君かい…ギタラクルの番号札を奪ったのは? 期待してるよ?」とか言っていたよね。もしかして、イルミの番号札を実力で奪ったと思っている!? というか、イルミがヒソカに何も説明していない!!

まずいぞ!!

幾ら、殺害禁止の試合でもこれはまずい。私が『まいった』の一言発する前に半殺しにされかねない。

「ちょ「試合は、始め!!」」

ヒソカに弁明をしようとした矢先に試合が開始された。

ヒソカが一步でも動く前に『まいった』といって降参するしかない。この試合でケガをすれば次からの試合に支障をきたす。

「先に言っておくけど…ギブアップなんてやめてくれよ? 力んで殺しちゃうかもよ?」

ソワ

一体どうすればいいのだ…『まいった』と言えばヒソカに半殺しにされる。というか、その一言を発することは出来るのか？ 相手は、ヒソカだぞ…。

ジー

ダメ元でイルミに視線で訴えてみる『我窮地にあり、至急助けを乞う』と…。

・
・
・

当然というべきだが、視線に気づいているが…何ら行動を起こしてくれない。

「な、何をすればいい？」

「くつくつく、そんなに怯えなくてもいいよ。なーに、ちょっとばかり準備運動をさせてもらえばいいよ？ 君がコレを見えないのは知っているから、手加減くらいはしてあげるよ？」

ヒソカが人差し指を立てた。

見えないが…恐らく念で何かしらの文字や模様を描いているのだろう。

誰も助けてくれない…『まいった』も言えない…ならば、ヒソカに遊ばれて敗北する！！

「体が温まったら、負けさせてくれよ！！」

「勿論？」

敗北させてもらう為に戦う…なんて酔狂な事をしているのだろうか。私は。懷から拳銃を取り出し開始の合図を切った。

ドゥーーーーーン　ドゥーーーーーン　ドゥーーーーーン

極めて強い念能力者相手なので、この拳銃も気にせず使えるのはありがたい。だって、当たっても死ぬ気がしないもん。周りの被害などお構いましに連射した。壁は崩れ、場外の試験官や受験生から非難の声が聞こえるが気にしている余裕などない。

しかし、流石はヒソカ…弾丸を普通に避けている。

くっそ！！

そして、一瞬で間合いを詰められた。

「いい銃だね…でも、腕前は三流といった処だね」

「よく言われます。でも、こっちの使い方は得意ですよ」

ヒュン

拳銃を捨てて、ベンズナイフに切り替えた。人体の急所目掛けて、

振るうナイフを余裕綽々で避け続けるヒソカに腹立たしさを感じた。
せめて、ひとたち…

「へえー、案外やるじゃん」

流石は、兄貴お気に入りの変態つてところか…

遊んでいるとはいえヒソカ相手によく粘っている。銃の腕前はお世辞にも褒められたものじゃなかったが…ナイフの使い方は俺より上手いな。狙いも速さも申し分ないが…、相手が悪すぎる。

「おいおい、あのヒソカに勝っちゃうんじゃねーか」

「それないよ オッサン。あの兄ちゃんもよくやっているけど、地力が違いすぎる。ヒソカはまだ、実力の1割も出してないよ」

ヒソカもギリギリでナイフを躲しているからタチが悪い。あと一歩で当てれそうだという微妙なさじ加減をしている。

だが、それもそろそろ終わりだな。

無傷なヒソカに対して兄貴のお気に入りには満身創痍だ。ナイフを避けながらサンドバックのように殴られている。素直に『まいった』と言って次の試合にかければいいのにな。あの怪我ではオッサン相手でも遅れを取りかねないぜ。

ドゴン

「おおおおおええええええー」

あゝ、ありやキツイな。ヒソカのレバーブローが完全に決まった。

「ははは、ごめん ごめん？ 思ったよりやるから力を入れちゃったよ。そろそろ、体も温まったしギブアップしていいよ」

「ゴツホゴホ…で、できればもっと早くそのセリフが欲しかったな。じゃあ、死ねええええええええ」

お気に入り最後の力を絞って、ヒソカの間合いに飛び込んでいった。なんて無謀なと思った…しかし、お気に入り左手に持っている物を見て驚愕した。

なっ！！

お気に入り左手に持っているのは兄貴の針！！

一体どういう経緯だ！！

あの兄貴だぞ…人に物をやるような性格じゃないぞ。

プス

「残念だ。脇腹を狙ったのにな…『まいった』」

「君も合格？ 次、頑張りなよ」

右手のナイフは、トランプで弾いたが左手の針に気を取られて回避が遅れたようだ。あのヒソカ相手に服だけとはいえ、攻撃を当てるとはね…。

お気に入りには、満足気な顔をしてそのままダウンした。

第15話（後書き）

最終試験終了です。

今回は、ライセンス取得のお話と
今後について話を混ぜようと思います。

第16話

全身がとっても痛いレイアです。

ヒソカの準備運動と言う名のサンドバックにされて、内蔵は勿論、肋骨にも何本かに罫が入った。おまけに、『まいった』と言ってからの記憶が無く…気が付けばリングの端っことで応急処置が施されて横にされていました。

やばいな…次の試合相手がレオリオとはいえ勝てるか微妙だ。

「ゴンと友達になりたいだとか？寝ぼけんな！！とつくにお前ら友達どうしだろーがよ」

レオリオの大声が私の怪我に響く。

ッ！！

リングの方を見してみると対戦順番が原作から微妙にズレたのが原因であろう。キルアとイルミがリングの外でにらみ合っている。

ここにきてやっとキルアがイルミの存在に気づいたか。

えっと…キルア試合は、ハンゾーだったはず。ハンゾーに負けたらボドロと試合になるはず。という事は、キルアはハンゾー戦で戦わずして負けるだろう。それがこの世界の予定調和といったところだろう。そして、ボドロ戦で相手を死傷させる事になるはず。

ならば、私は不干涉を貫き通す！！

なにやら、イルミの発言で扉の方に受験生と試験官が扉の前に集まっている。どうやら、ゴンを殺すとか発言をしたのだろう。それにしても…原作主人公って人を惹きつける才能が凄いな。ゴンを守る為にあれだけの人が動くのだからさ。

私なんて、怪我の治療をされてそのまま放置だよ。ちょっと扱いがアレじゃない？ これはハンター協会に文句を言ってもいいレベルだと思うのだよな。

これでキルアの実家フラグは確立した。私は、少しでも自分の傷を癒す事に専念しよう。そして、この時間を有効活用する為にミルキに進呈するフィギュアの構想でもねっておこう。

「やあ、目覚めたというのに随分と無関心だね。三次試験では、お仲間だったんだろう？」

イキイキとした顔のヒソカが私の所にやってきた。きっと、乱戦になる事を望んでいるのだろう。会長と手合わせしたくてウズウズしているように思える。これだから、戦闘狂は困る。

「イルミ様の前に立ちはだかるなんて冗談じゃありません。私は、自殺志願者ではありませんので…。それより、全身が痛いです」

「痛いように殴ったんだから当然？」

まるでジャイア○みたいな言い訳をしてきた。

顔をぶん殴りてー！！

だが、そんな感情をぐつと堪えた。

「率直に聞きます。あなたから見て私の才能は、どの程度の物ですか？」

「君…自分に才能があると思っているの？」

グザー！！

あまりの率直は発言に私のガラスのハートが砕け散りそうになった。

「もう少しオブラートに包んでくれても…」

「僕、正直者だから？ でも、君も悪くはなかったよ。アレをつけた状態でそれなりにいい動きをしていたしね？」

そういえば、体が無性に軽いと思った。治療の際に誰かが外してくれたのだろう。私のすぐ横にいつも付けているワジマさんお手製の筋トレ用グッズが置かれていた。日常生活に溶け込みすぎて忘れていた。次の試合では、忘れずに外そう。少しは、まともな勝負ができるようになるはずだ。

では、早々に休むとしよう。

「悪いけど…次の試合の為に体調を万全にしたいので、少し寝ます」

「ああ、オヤスミ？」

どうせこの後の展開は読めている。私にとっては、ヒソ力戦が終わった以上もはや残りの試合など消化試合も同然。

オヤスミ私の意識。

数時間後。

「…なさ、起きなさいって言っているでしょうが!」

ハッ!!

仮眠のつもりが熟睡してしまったようだ。しかも、目覚めればあら不思議…石造りの部屋だったはずが、ご立派な部屋に早変わりしていた。

「試験は!? というか、メンチさん なぜここに!」

「99番が不合格で試験は、終わったわ。それにしても、ココが何処かと言う質問より、何故私がここに?という質問が先に出てくるなんて…まるで私に会いたく無かったみたいじゃない」

あ…やばい。

「そ、そんな事ありませんよ。こんな美人な試験官に会えるのならば、このレイア 地の果てまではて参じるつもりです」

シャーシャーシャー

やばい、メンチが包丁を研いでいる。

ゴクリ

まさか、会長が私を売ったのか！！

いや…それはないか。仮に、会長が私を売るならば早々に売っていたはず。そして、最終試験前に私はメンチの手によって処断されていただろう。

「口だけは達者のようね。それで、あんた私に何か言う事があるんじゃない？」

「メンチさん…お尻におできが「死ねええええ」グウエエ」

ヒソカに殴られて痣になっている位置にレバーブローがお見舞いされた。

病人に追い打ちをかけるなんてハンターは、血の涙もないのか！！

「ハンターなれた事に感謝しなさい。本来なら、八つ裂きにして魚の餌にしてやるだから…無くすんじゃないわよ ホラ」

どうやら、ハンター殺しは重罪らしい…よくわからないが助かった。メンチから投げられたハンターライセンスを受け取った。

ほほう、これが噂のハンターライセンス！！ 本当に見た目は地味だな。

「あ、ありがとうございます」

「それと、もうすぐハンターライセンスの説明会をやるから参加しな。場所は、案内表示を見ながら勝手に行きなさい」

ライセンス説明会場にて。

部屋についてみると私が最後だったらしく、ゴンとイルミが口論している真っ最中に入ってきてしまったようだ。無駄に注目を集めてしまい視線が痛い。

それにしても、ゴンって凄いな…念能力者のイルミの腕の骨を腕力だけでへし折るんだからさ。一体、どんな手品だよ。後、無駄に直感が優れている…イルミが針を埋め込もうとしたのを察知して逃げるのだからさ。こいつの才能が妬ましいわ。

「諸君、よろしいかな？」

会長が止めに入り、ゴンとイルミの試合はそこで終わった。その後、ハンターライセンスの説明が滞り無く行われた。

説明を聞けば聞く程、すごいカードだと思う。

民間人が入国禁止の国の90%と立入禁止区域の75%に入れるとか、公共施設の95%がタダとか、売れば人生7回遊んで暮らせるとか…特典が盛り沢山だ。

個人的には、立入禁止区域の75%に入れるのが特にいいと思う。ピトーを手に入れた際はひと目につかない場所に隠れようと思っているからね。まあ、木を隠すのなら森の中というのもあるけどね。

当然のことながら規約等も多く、説明の大半がそれに関する事だった。まあ、必要最低限事項さえ覚えていれば問題ないだろうと思っ

殆どを聞き流した。

20分後。

「ここにいる7名を新しくハンターとして認定致します!!」

くつくくはっはっはっは!!

ついについに、私の人生の課題であったハンター試験を合格した！
！これでピトー獲得の足がかりを手に入れたに等しい。

年甲斐も無くガッツポーズをしてみた。

後は、念能力だ!!

一体誰が私を師事してくれるのだろう…もしかして、誰かが訪ねて
着ってくれるわけではなく自分から教えを請いに行くのかな？ ゴン
とキルアは、たまたま行った天空闘技場でメガネのオッサンと出会
い覚えていたからね。

裏試験のことなので誰かに聞けないしな…やっぱり、道場の師範代
に相談かな。

「では、解散!!」

会長の合図とお供に集まった七名が散っていった。ゴン一行は、キ
ルアを助け？に行くのだろう。わざわざ、殺し屋の総本山に行くな
どアホの極みと言いたい。

さて、私はまず両親に電話をしよう。合否に関わらず、心配をしているだろうからね。ついでに、パソコンでこちら辺のお土産屋を探そう。折角、遠くに来たのだからお土産を買って帰らないとね。

「おい、あんた！！ キルアが居るククルーマウンテンって知ってんだろう？ 以前に仕事の関係でどうか言っていただろ」

私が、携帯を取り出して両親に無事の報告をしようとした時に空気が読める（笑）レオリアが話かけてきた。

はつきり言おう…私は、これ以上原作組みと絡みたくない。

「よかったら、案内してよ」

「私からも頼む」

ゴンとクラピカまで私の元にやって来た。

「悪いが、私も色々都合があるので案内する事は出来ない。だが、パソコンで調べてもらえば場所もわかる。ライセンスを使わずとも行ける場所なので、悪いが自力で行ってくれ」

「そっか、わかった。またね」

ゴンが元気に去っていった。

「ああ、さようなら」

こうして、私は原作一行と別れた。

「ほれ、後たつたの100kgじゃぞ」

くっそ!!

イルミ兄いとの取引で、体重を30kg落とすからレイアに番号札を譲ってくれと言ったのは早計だった。幾ら、フィギュアに目が眩んだとはいえこれは辛い。

じいちゃんが全面的に協力してくれる事もあり、体重がどんどん落ちてきているが…その反面、趣味に裂ける時間が大幅に減った。

「はあはあ…まだ、100kgもあんのかよ」

「取引したのじゃ、諦めるんじやの。それにしても、ダイエットすると聞いた時は耳を疑ったが…本当に、欲望に素直じやの。まあ、ワシから言わせてもらえば孫にこんな機会を与えた小僧に感謝したいくらいじゃわい」

レイアの野郎め…これで、くだらないフィギュアだったら地獄を見せてやるぞ。

もうすぐ、公開予定のアニメの準備で忙しいのに、こんな事に時間をさかせやがって…こうなったら、即効で痩せてダイエットを終わらせてやる!!

「うおおおおおおおおお!!」

「その調子じゃ」

ミルキのダイエットは、僅か一週間で体重を30kg落とす事に成功をした。その間、レイア宛にひたすら愚痴のメールが届けられ、身の危険を感じて命懸けでフィギュアを作成するレイアであった。

第16話（後書き）

これにて、ハンター試験辺終了です。

次は、念能力取得に行こうかなと思います。

第17話

ハンターライセンスを手に入れ、実家に帰り家族愛を実感しているレイアです。

実家に帰ったら両親の熱い抱擁を受け、ちょっぴり恥ずかしかったが嬉しくもあった。しかし、家族というのは大事であると再認識した。

両親は、私が買ってきたお土産よりハンターライセンスに興味津々らしい。普段お目に掛かれない代物の為、触ってみたり記念撮影したりしていた。しまいには私のライセンスを使い、父親が早々にハンター専用サイトに繋げてみようとしたので止めに入りました。自宅でそんなサイトに繋いだらライセンス目当ての強盗がホイホイ来ちゃうぜ。

そんな両親との楽しい一時を過ごし私は作業場に戻った。

ミルクから何故かダイエットの報告とそれに伴う愚痴が私の所に届けられる。しかも、毎回メールの最後に早く、フィギュアを…といった凄まじいプレッシャーをかけてくる。

「こりゃ…マジでやらねば身の危険がありそうだな」

普段より一層作り込みますか…特に制服とか下着とかを。

数日後。

ハンター試験の疲れも癒え、フィギュアの構想も纏まったのでそろそろ本格的に念能力の師匠を探そうと道場へ足を運ぼうと思う。

もしかしたら、師範代が念能力の師匠になりかねないから手土産くらいは持って行った方がいいかな？ フィギュアとかフィギュアとかフィギュアとか…いや、師範代は確か既婚者だったな。

・
・
・

「リア充爆発しろーーーーー!!」

思わず、道端で心の叫びを大声で叫んでしまった。

既婚者だ…ふざけるな!! 俺がどれだけ欲しくても手に入らない存在を手に行っている連中が憎くて堪らない。憎しみで人が殺せるなら軽く10回は殺しているだろう。

「見ちゃいけません」

「最近、変なのが多いな…」

ヒソヒソ

あら…近所の人の目が何故か白い。まるで私が痛い人みたいじゃないか。

道場にて。

日頃お世話になっていた　むさ苦しい男が充滿している道場へと足を運んだ。全く、男しか居ないとかマジで終わっている道場だなと思っよ。まあ、それでも流行っているのだから凄いいけどな。

私は、別室に案内された。

しばらく待つと、30代位の無精髭のオッサンが部屋に入ってきた。何を隠そう、この野原ひろ○みたいな人こそ　この道場の師範代である。一見、ただのオッサンだが師範代になる位なので当然強い。

「お久しぶりです。師範代」

「よお、レイア。ちゃっかり、ハンター試験受かったんだって？　とりあえず、よくやった」

本当にあんたの道場とゾルディックのおかげだよ。

ありがとう師範代。

というか、師範代も分かっているでしょう。私がなんでこの時期にここに来たのかをね。師範代の方からさりげなく裏ハンター試験の事を話してもらっう為に来たのだからさ。

「ここに来たのは、試験合格の報告だけじゃないのだろう？　でえ、レイア…お前はどこまで知っている？」

私を見る師範代の目が鋭くなった。

あれ…なんか疑われている気がする。想定していた流れと少々違うが問題あるまい。ここは正直に答えておくのがいいだろう。嘘をつ

く意味もないしね。

「裏試験の事を少々…その件で、今日は師範代にお願いがあつてきました」

「一体、どこで耳にしたのやら…で、言ってみな」

「私に念能力を教えてください!!」

ズサー

師範代に土下座してお願いした。

私は、是が非でも心源流拳法という真つ当な所から学びたいと思つていた。ミルキ辺にお願いしても教えてはもらえないかもしれないが…しかし、ゾルディックの人達は、人に教えるのが得意そうには見えない。こういう基礎は、しっかりとしておいた方が良いと相場が決まっている。

「はあ…レイアがハンター試験合格してからこの日が来るのは分かつていたが、タイミングが悪いな。教えてやりたいのは山々なんだが生憎と俺はプライベートの仕事があつてな。だから、指導してやる事はできねーんだ」

え…この人、さりげなく私の念能力の指導よりプライベート優先しやがったよ。くっそ!!…こんなのが師範代やっていていいのかよ
ネテロ会長。職務怠慢で訴えるぞ!!

「一応、聞きますけど…どんな仕事ですか？」

「念能力を知っているお前なら話しても問題ないだろう。俺の念能力は、念能力を撮影する事が出来る。通常のカメラだと、念能力は映らない。しかし、俺の能力はそれを可能にしている。どうだ、凄いだろう？」

…あれ？ 師範代、自分の念能力について話過ぎだろう！！ とい
うか、なんて役に立たない能力だ。しかも、どこかで聴き覚えての
ある能力だぞ。

「いまいち、凄いのだが凄くないの다가分らないです。それで、
一体その能力で何をするのですか？」

個人的な予想では、犯罪者の念能力を記録して保管しておくと言っ
た仕事なのだろうな。念能力者にとって他人に能力がバレたら対策
を取られて非常に辛い状況に置かれかねないからね。

「おう、実は副業でA○監督兼カメラマンもやっていてな。その仕
事関係でちよつと海外に行く事になったんだ。だから、師範代の業
務は全て高弟に任せる。だから、すまんな レイア…他を当たって
くれ」

…は？

最近、耳が遠くなったのだろうか。師範代の口からありえない副業
が聞こえた気がした。

既婚者のくせに、一体 ナニを撮影するきだよ！！ どんだけ、メ
モリーが無駄遣いをしているんだよ。普通のカメラで十分だろう！！

「師範代！！ 副業のせいで私に念能力を教えられないのは、納得

しないけど理解した。でもさ…、いくらなんでも他を当たってくれて無茶苦茶でしょう。ここは、師範代として別の指導者を用意してくれるのが、普通の流れでしょ…！」

このまま、放置などされてなるものか！！ 最低限、別の人への推薦状を手に入れるとかしないと詰む！！

「うーん、俺の同期でウイングって奴がいるが…あいつは、既に弟子持ちだしな。………お！！ 喜ベレイア！！ お前の指導に適任が一人いた。ちよっと、連絡してやるから待っている」

師範代が携帯電話を片手に部屋の隅で誰かと話している。

一体、誰なのか気になるが…それよりも、絶対にウイングって言っただよ。弟子もいる事からして、確実にあのウイングだろう。

世の中狭いな…。

数分後。

「喜ベレイア。話が着いたから、三日後のこの時間にまた来い。お前さんの念能力の師匠に会わせてやる」

「ありがとうございます！！ 流石、師範代頼りになります」

一体、誰に頼んだのかは知らないが一安心していいだろう。もし、ウイングが指導員だったら人生オワタだな。キルアフラグはもう沢山だ。

三日後。

本日は、師範代とこれから世話になる念能力の師匠の為に市販で売っている最高級品のお菓子を持ってきました。羊羹一本5万ジェニ―と冗談みたいな価格のお菓子です。

売っている店も店だが…こんな高いお菓子一体だれが買うのだろうね。

「これ美味しいな」

ムシャムシャ

「当然ですよ 師範代。高いんですから…」

二人で私が持ってきたお菓子を食べつつ待っている。

コツコツコツ

私達が美味しく、お菓子をいただいていると部屋の前で足音が止まった。

そして、中に入ってきた人を見て私は絶句した。

「久しぶりだわさ。全く、師匠を呼びつけるとはいい度胸じゃない”変態ジエームズ”」

「たかが、副業がA〇監督兼カメラマンをやっているだけでその呼び名は酷いですよ」

ここにきて、まさかのビクネーム到来だ！！ ウイングと同期だからまさかとは思っていたが…あの超人が私の念能力の師匠になってくれるとは、嬉しい誤算だ。

「レイア、この人は俺の師匠のビスケット「オリバー」…！」
「え」

ドゴオオオーーーーン

思わず叫んでしまい、気づけば壁の一部になっていたレイアである。

レイアが師匠の家を訪れる前日の事。

「今日は、スタジオにゴリラ愛好家のゴレイヌさんに来ていただいております」

ブーーーーー！！！！

思わず口に使っていたビーフシチューを噴射してしまった。

「ゲッホゲホ！！シチューが気管に…ゴッホゴホ」

というか、ゴレイヌさん あんた何をやってんの！？

それに、ゴリラ愛好家ってなんだよ…動物愛好家ならまだしもゴリ

ラ限定ってあんたどれだけゴリラ好きなのだよ。念能力にする位だから、わからないでもないよ。

「初めまして、ゴリラ愛好家のゴレイヌです」

「実は、ゴレイヌさんはゴリラに育てられた過去を持っておられるそうです。しかも、飛行機事故でジャングルに不時着した唯一の生き残りでもあるのです。本日は、その時の再現映像からゴレイヌさんの感動ストーリーとゴリラの良さを皆様に知っていただきたいと思います」

飛行機事故でジャングルに墜落し、生き残った赤ん坊がゴリラに育てられて立派になる感動の再現映像が流れ始めた。

「ホワイトゴレイヌ！！ ブラックゴレイヌ！！」

ゴレイヌの親役のゴリラが何故か念能力であった。突っ込みどころ満載のギャグ番組じゃねーか。というか、レイザーにも認められる程のチート能力者がなんでこんなドキュメンタリー番組に出演しているのだよ。

だが、この映像を見てはつきりした事がある。ゴリラに育てられる位の経験をしないと動物を具現化などできないという事なのだろう。ゴリラを舐めたり、ゴリラと遊んだり、ゴリラと裸の付き合いをしたり、ゴリラと…ゴリラと…

キモ！！

自分が具現化系でも絶対に動物を具現化するのは止めようと思うレイアであった。

第17話（後書き）

月曜日からレオパレス暮らしが始まる…これで往復の通勤時間約3・5hがなくなると思うと嬉しくて涙が出る。

さて、通勤時間が浮いた分執筆頑張ろう。

第18話

ビスケによって、全治三日の傷を負わされたレイアです。

ビスケ曰く、なんか悪口を言われた気がしたのでとりあえず殴っておいたそうです。この世界にビスケッ。・オリバなんて架空の人物が居ないというのに女の勘の良さにビックリだよ。

そして、本日改めてビスケと対峙しております。

「先日は、失礼致しました。気が動転して変な事を口走ってしまいました。改めまして、今日からよろしくお願いします」

「生きていて良かった。てつきり、殺しちゃったと思っただわさ」

改めて、鍛えていて良かったと思ったよ。きっと、一般人なら死亡していたよ。まあ、この際そんな事は些細な問題だ。

「最初に言っておくけど9月から私用で出かけるから8月末までしか指導しない出来ないだわさ。だから、選ばせてあげる。『基礎だけみっちりやるノーマルコース』か『基礎から応用まで一通りやるハードコース』か『基礎・応用はもちろん実践までやるスペシャルハードコース』…ちなみに、ハードコース以上は寝る間も惜しんで鍛えるから死んでも文句を言わない事が絶対条件だわさ」

分かってはいたが、8月までか…間違いなく、グリードアイランドに参加する予定なのだろう。その際に、足手纏いになる可能性がある弟子など邪魔というわけか。

わかります・・・私の才能は、所詮その程度のもの。

本音を言えば、キメラアント誕生までみっちり鍛え上げて欲しかったが…そういう訳にもいかないか。

この年齢まで念能力を手にできず、才能も乏しい…そんな私が選べるコースなど決まっている。キメラアントが出現する約一年後までに私は、最低限師団長クラスから逃げられる位の力を手に入れなければ行けないのだ。

「理由は言えませんが、私には強くなれないといけないのです。だから、この身がここで潰れるならソレまでです…だから、『スペシャルハードコース』でお願いします!!」

「死んだほうが楽と…言っても無駄なようね。はあ、分かっただわさ…まず、あんたがどの位強いか見てからプランを立てるから、私を殺す気で攻撃してきなさい」

私の实力を見て、どこまで死なないかの限界点を図るのだろう。

ビスケがどこからでも来なさいといった感じで正面に立っている。はつきり言って、私が攻撃しやすい様にわざと隙を残しておいてくれているのが性格の厭らしさを感じる。

私程度の攻撃、いつでも対応できるといった感じた。まあ、間違っていないのだろうが…腹が立つよ。

普段つけている重石を外して、ベンスナイフを片手にもう片方には拳銃を手にした。

ここまで実力の差があると絡めてなど無意味だろう…それに、ビスケは私がどの程度死なないかを見極めただけだ。…ならば、正面から行かせてもらおう。

「では、お言葉に甘えて…殺す気で行きます!!」

まずは、初手…銃口をビスケに向けるふりをして、ぶん投げた!!

「えっ!?!」

ビスケは、少し驚いたようだが余裕の笑みで投げた拳銃を避けた。

ズドン

後ろの木に当たり、めり込んだ。

弾を撃つてくると思っていたのだろう…しかし、自慢でないが銃の腕前は三流だ。だから、鈍器として活用したのだ。あの銃は、重量がバカみたいだから本気で投げれば余裕で人が殺せる位の威力になる。

私は、ビスケとの距離を詰め左手に持ったベンスナイフで急所を狙いつつ、回し蹴りを放った。無論、空振りに終わる。

「なにか、良い蹴りだわさ…だけど、正直過ぎる」

「ですよね」

元より、当たるとは思っていないが会心の一撃だと思った蹴りが楽

々回避されると少々悲しい。では、もう少し攻撃に変化をつけて行ってみよう。攻撃途中で軌道を変えるのは、肉体的に少々つらいがやってみるかな。

「さあ、どんどん来なさい。後、私からも反撃をするから耐えなさい」

「了解、ビスケ師匠」

了解と言ったものの…耐えられる気が全くしない。

手加減してくれますよね？

十分後。

ヒュンヒュン

ナイフの風の切る音が聞こえる。

何度、急所を狙い振っても決してビスケに届く事は無く切れるのは空気だけ。これが純粋な身体能力の差…才能の差だというのだろうか。ナイフの使い方に自信があつたのに、十分近く振って服にすら掠らせる事ができない。

ドン

「これで32回目」

「ぐおおおええええ」

美少女モドキから脇腹に打ち込まれた拳が、私の体をくの字にさせた。その小さい体から放たれたとは考えられない程の威力だ。流石は、身長3m越え？の筋肉怪人だ。

しかし、ヒソカ戦でも同じような痛みを味わった…悲しい事に痛み耐性がついてきた。

まだ、耐えられる。

「よく耐えるだわさ。 何の目的があつてそんなに頑張るか知らないけど、男の子なんだから一度決めた事は最後までやり遂げなさい」

「りよ、了解」

肉体に蓄積されたダメージからして後1・2発食らえば立ち上がれなくなるだろう。ならば、最後にアレをやってみますか。前世で読んだ漫画を思い出しつつ、練習に勤しんだ技を披露しましょう。まだ、練習中で不安要素大有りだけだね。

体を極限まで脱力させ、手足を鞭のようにしならせて皮膚を打つ打撃技をね！！

ナイフも指先に固定できる用の小道具も用意してある。

ブラインブライン

脱力させて両手を振り子のように振る。

「へえ、それがあんたの隠し玉？」

「練習中ですが…そんなところですー！」

鞭のような両手でビスケに最後の猛攻を仕掛けた。

ヒュヒュヒューン

ナイフを持った腕でビスケの行動範囲を狭めて、もう片方の腕でビスケ本体を狙う。これで私のやり方だ。ヒソカもそうであったようにベンズナイフだけは、念能力者相手でも確実に避けるまたは防ぐといった事が分かっている。

無論、この程度の作戦でビスケに攻撃を当てられるなど思っていない…だから、更に小細工をする。

ビスケがナイフを回避し、私のもう片方の腕を回避しようとした瞬間 腕の関節を外した。

ゴキン

「——ッ！！」

関節を無理やり外す事で激痛が走る。しかし、これでビスケが想定していた攻撃の射程が急に伸びた事になる。

私の目の前で今まで楽々と回避していたビスケの目が一瞬だけ鋭くなった。

目の前の光景がスローモーションに流れている。私の腕がビスケの体に蛇のように巻きつき背中平手打ちを食らわすのが見えた。

捉えた!!

パーーーーー！

風船が破裂するような乾いた音が響いた。

「ぎゃあああああああーーーーー!!」

手のひらから来る痛みに私は思わず叫んでしまった。

ダメージを与えたと思ったのに、逆にこちらがダメージを与えられた。手のひらを見てみると皮膚が弾けており、真っ赤に染まっていた。

「バカ!! 治療するから来なさい」

この後、ビスケの治療により手は無事に元通りになった。もちろん、治療の際にいろいろと無茶をやったことなどを責められた。しかし、何気弟子思いの良い師匠だなとちょっと感心した。これで、本当に美少女だったらちよつと惚れたかと思った。

最初は、師匠に自分の弟子の指導を頼むとか、ふざけた事を言った”変態ジエームズ”にお灸を据えに来るつもりだけだった。だけど、レイアに会ってちよつとだけ気が変わった。

レイアの印象は、まさに昔のジェームズと雰囲気がまるで同じだった。自分の欲望に素直でアホで才能がない。

まあ、努力する才能は持っているようだけどね。

昔を思い出すつもりじゃなかったけど、グリードアイランドに参加するまで期間どのまでこの子が強くなれるか暇つぶしで引き受けてみた。

「本当、何の目的があって努力しているか知らないけど…頑張る男の子って素敵よね。………後、この子ソッチ系もいけそうだし。将来的に…グフフフ、楽しみだわさ」

治療を終えて疲れ切った顔で寝ているレイアの顔を見て思わず、将来が楽しみだわと思ってしまった。主に、ソッチ系の意味で…。

それにしても、ナイフ・銃・隠し持っていた針…どれもこれもめったにお目にかかれないような一級品を一体どういう経由で手に入れたのだろう。

後、気になるのは最後にレイアが使った打撃だ。あの打撃…食らえば一般人なら激痛で死んでいても不思議でない位の威力が込められていた。私も堅で防がなければ、結構痛かったと思うしね。

いくら、殺す気がかかってこいと言ったけど…私の容姿に対して一切の容赦なく殺す気でくる辺り、少なからず将来に心配を感じるわ。色々と隠してそんな子よね。

辛気臭い事は、ここまでにして：明日からどういうプランで育てるか考えなくちゃね。時間的に考えて、精孔は無理やり起こす事にしよう。本当にジエームズを鍛えた時の再現になりそうだから。

こうして、レイアの地獄の日々が始まりを迎えた。

第18話（後書き）

戦闘シーンなんて高等なものは作者には書けません！！

レイアの周りには、変態しかいない…そろそろ、まともな人が一人くらいほしいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8889y/>

まだ見ぬ嫁の為に

2011年12月31日19時49分発行